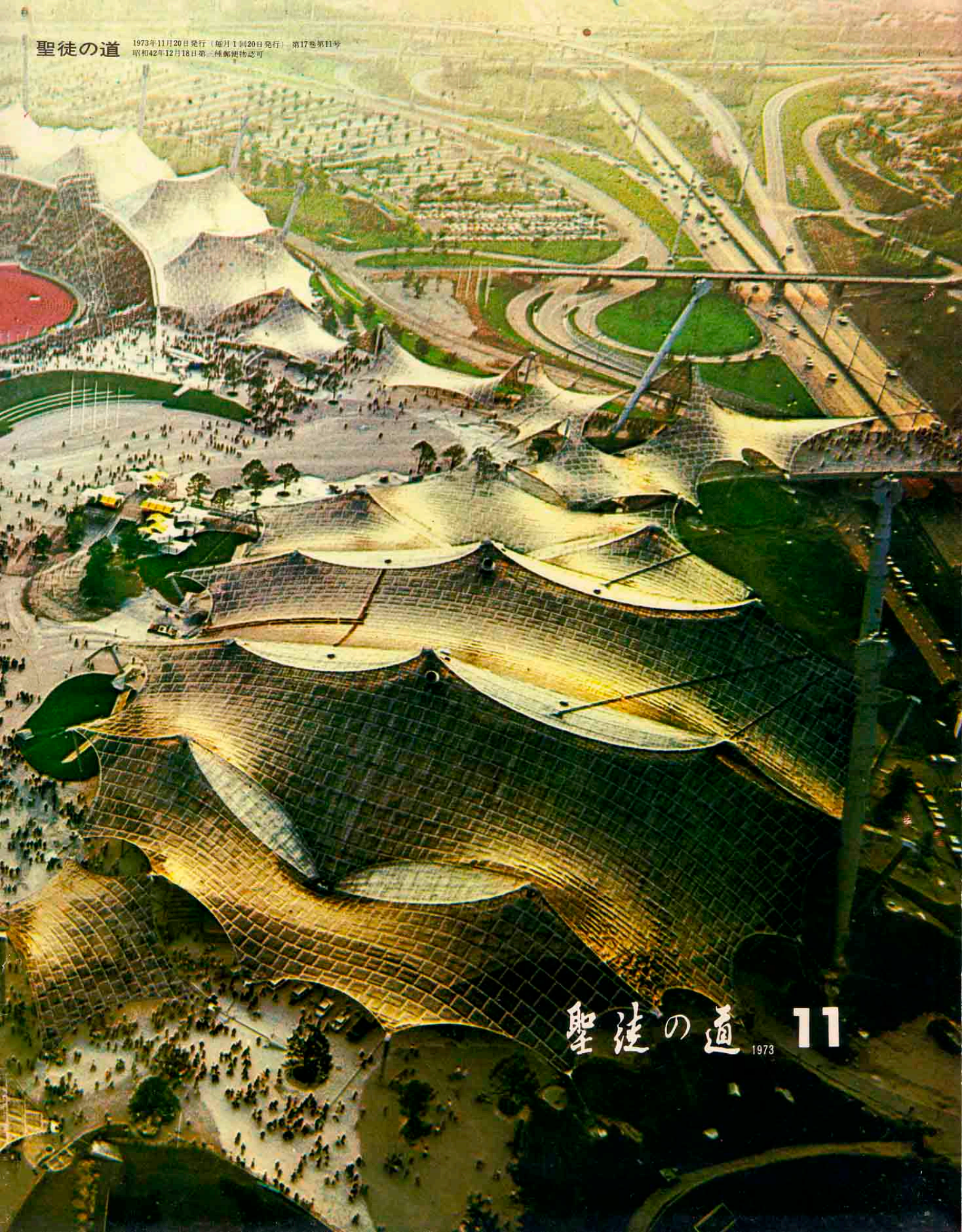
聖徒の道　1973年11月20日発行（毎月1回20日発行）　第17巻第11号
昭和42年12月18日第三種郵便物認可



聖徒の道 1973 11

聖徒の道 1973

11月号

もくじ

唯一の道…… 481 ……マリオン・G・ロムニー
1973年ミュンヘン地区総大会…… 484
自由意志の3つの面…… 492 ……トーマス・S・モンソン
いそがずに歩みなさい…… 495 ……ミルドレッド・バーセル
豊かな知識を身につけるには…… 498 ……ブジェーン・クリスチャンセン
創　造…… 501
小さなお友だちへ…… 504 ……デルバート・L・スティプレー
サッカーボール…… 506 ……シェリー・ジョンソン
ビクター・L・ブラウン監督との一問一答…… 509
教会の管理監督…… 511
見守る者よ悪人を戒めなさい…… 512 ……エズラ・タフト・ベンソン
信仰，希望，愛があった…… 516 ……ボーン・J・フェザーストーン
灰色の羽のカナリヤ…… 519 ……トーマス・S・モンソン
救いは教会を通じて得られる…… 522 ……マーク・E・ピーターセン
ローカル・ニュース…… 526

今月の表紙

ドイツのミュンヘンにあるオリンピック公園。第3回地区総大会はここで開催された。

（484ページ参照）

聖徒の道11月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5—8—10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5—10—25
定　価　年間予約　1,300円　1部　130円
海外予約　1,800円

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会
ハロルド・B・リー
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会
スペンサー・W・キンボール
エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・スティプレー
リグランド・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー

諮問委員会
J・トーマス・ファイアンズ（内務伝達部長）
ジョン・E・カー（配送・翻訳部長）
ドイル・L・グリーン（教会誌編集主幹）
ダニエル・H・ラドロウ（教育資料担当主幹）

統一誌編集主幹
ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター
八木沼修一

ローカル編集
高木まりゑ

大管長会メッセージ

唯一の道

第二副管長 マリオン・G・ロムニー

「しかし，たといわたしたちであろうと，天からの御使であろうと，わたしたちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら，その人はのろわるべきである。わたしたちが前に言っておいたように，今わたしは重ねて言う。もしある人が，あなたがたの受けいれた福音に反することを宣べ伝えているなら，その人はのろわるべきである。」（ガラテヤ1：8，9）使徒パウロはガラテヤ人にこう書き送った。

ガラテヤの聖徒たちは少数派で，まわりはほとんどが異教徒か，キリストへの信仰を公言しながらユダヤ教の律法に固執しているためにジュデイザーと呼ばれた少人数のユダヤ人のキリスト教徒で占められていた。パウロがキリストにより律法はすでに成就されたと教えたにもかかわらず，それらのにせクリスチャンの及ぼす圧力で，ガラテヤ人は「モーセの律法」に従わされていた。

ガラテヤ人の背教を聞いたパウロは手紙を書いた。その目的は，できるものなら彼らに，イエス・キリストの福音こそ救いに至る唯一の道であると確信させることであった。パウロは，まわりを取り囲む偽りの教えに誘われたり堕落したりしないように，彼らを力づけようとしたのである。

私たちは現在，ガラテヤの聖徒たちと何ら違わない環境に置かれている。昔彼らがそうであったように，今私たちはイエス・キリストの福音の教えに従うことの大切さをみくびる社会に住んでいる。たとえば，サタンは，どの道も天国に通じるという教えを多くの人に信じ込ませ，また私たちをも惑わそうとしている。私たちは，神はいないと教えられ，「われらは明日死ぬかも知れないから，飲んだり食ったりして楽しめ，そうすればわれらは幸福で満足である」と言われている。また，ある人々はこのようにも言う。「飲み食いをして楽しめ，しかし同時に神をおそれよ。神は小さな罪を犯すことは許したもう。それであるから少々偽を言い，人の言葉につけ込んで欺き，隣人をおとし入れる穴を掘れ。これは少しも悪い事ではない。われらは明日死ぬかも知れないから，すべてこのようなことをしても差支えない。たとえ，われらに罪があると認められても，神はわずかにわれわれを鞭うちたもうだけであって，われらは結局神の王国に救われる。」（Ⅱニーファイ28：7，8）

また私たちは「心に誇っている智恵者，……偽りの教えを説く者，みだらな行いをして主の正しい道を曲げる者」たちに圧力を加えられている。（Ⅱニーファイ28：15）

これらの悪い影響は実際に存在し，多くの人々をその勢力下におさめている。

しばらく前のこと，末日聖徒の家庭に育ったひとりの立派な青年が，勉学のために家を離れた。彼は国内有数の大学に入学し，帰省した折に，自分は宗教その他環境を異にしたさまざまな人々と交わり，あらゆる点で彼らも自分と同じであることを発見したと語った。それで，彼らが従わないこの教会の規律に，自分が縛られる理由はないというのであった。

最近青年層の指導者が教えてくれたところによると，青年たちは大学や職場で，教会の標準と相反する信条や態度を持つグループと常時交流するようになったという。彼らは教会の活動に参加しているが，それでもなお，絶えず彼らを脅かす妥協という誘惑に対して，もっと力をつける必要があると語っている。

このような，またその他数えきれないほどの信仰を覆えそうとする状況の中にあって，私たちはしばしば警告の声を受ける必要があり，いつも圧力に対する防備を固めていなくてはならない。

私たちはパウロがガラテヤ人に与えようとした確信すなわち天に至る道は多くない，ただひとつであるという確信を持つ必要がある。イエスは繰り返し繰り返し聞く者たちの心にこの真理を刻みつけようとされた。山上の垂訓の中で主は言

われた。

「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく，その道は広い。そして，そこからはいって行く者が多い。」そしてこう続けられた。「命にいたる門は狭く，その道は細い。そして，それを見いだす者が少ない。」（マタイ７：13，14）

イエスは復活後アメリカ大陸を訪れたとき，これと同じ教えを同じ言葉でニーファイ人に教えられた。（Ⅲニーファイ14：13，14）またこの最後の神権時代に，主は同じような言葉でこの教えを繰り返された。（教義と聖約132：21—25）

これらの聖句の教えは，リーハイの見た生命の木の夢の予言を思い出させる。あなたがたは，リーハイが夢の中で「川の岸に沿ってずっと延び，私の立っているそばの（生命の）木の所まできていた一本の鉄の棒」を見たことを思い起こされるであろう。（Ⅰニーファイ８：19参照）棒にしっかりとつかまり続けた人は救われ，神の言葉を表わすその棒につかまって行こうとしなかった人は，「暗黒の霧」に迷って見えなくなってしまった。

狭い門に入るための鍵は主イエス・キリストを信じる信仰である。つかまなくてはならない「鉄の棒」は，神の言葉であり，福音の教えである。救い主御自身の教えはもとより全聖典が言わんとしているところは，キリストの神性とキリストを信じる信仰の重要さとキリストの戒めを堅く守ることの重要性である。

主は予言者ジョセフ・スミスに言われた。「……もし汝らこの世に於てわれを受け入れなば，汝らわれを知りて最高の栄に進むを得ん，すなわちわが在るところに汝らもまた在らん。」（教義と聖約132：23）

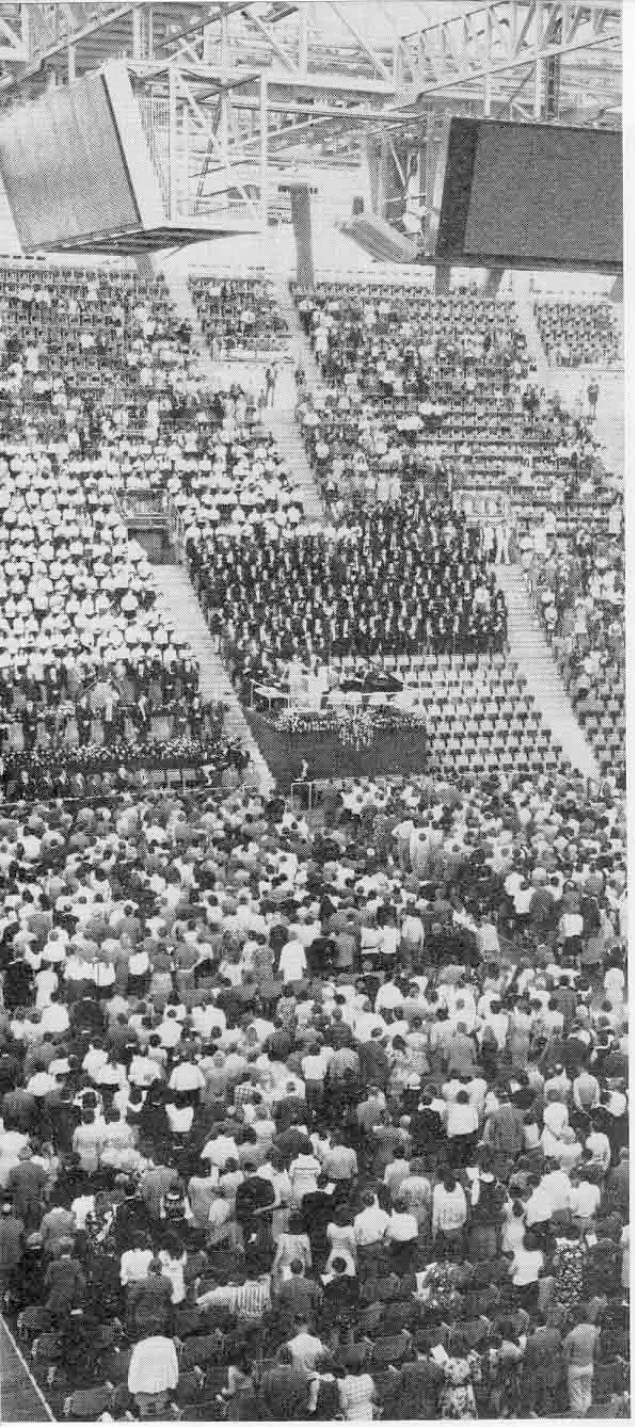
主を受け入れるには主の戒めに従うことが要求される。これは厳然たる事実であって，私たちが理解し従わなければならないものである。幸い私たちにはその要求を満たす力が与えられているので，努力するならばその要求に応えることができる。

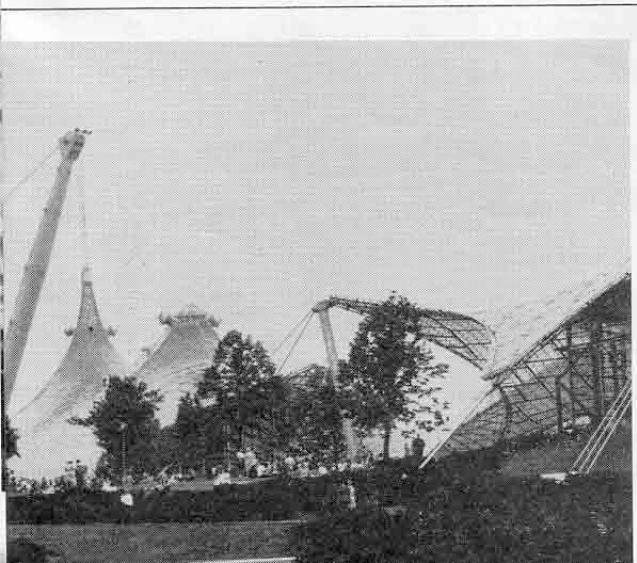
1832年９月に，主は予言者ジョセフ・スミスと６人の長老に言われた。

「われ今汝らに一つの誡命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。そは，汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。主の言は真理にして，およそ真理なるものはすべて光なり。およそ光なるものはすべて『みたま』にして，すなわちイエス・キリストの『みたま』なり。『みたま』は世に来るあらゆる人々に光を与え，また『みたま』はその声を聴く全世界のあらゆる人々を照すなり。この『みたま』の声を聴くすべての人は神に来る。すなわち，御父の許に来るなり。』（教義と聖約84：43—47）

イエスはトマスに言われた。「わたしは道であり，真理であり，命である。だれでもわたしによらないでは，父のみもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：６）道はただひとつである。

ペテロとヨハネは「美しの門」と呼ばれた神殿の門のところで，足のきかない男を癒した。これは古代のキリスト教会において使徒たちによる初めての奇跡であった。後にペテロとヨハネがユダヤの評議会で裁判官たちの前に立たされ，行なった奇跡について尋問されたとき，先任の使徒ペテロはイエスの教えられた真理を宣言した。「あなたがたは，いったい，なんの権威，また，だれの名によって，このことをしたのか」という質問に答えて，「ペテロが聖霊に満たされて言った，『民の役人たち，ならびに長老たちよ，わたしたちが，きょう，取調べを受けているのは，病人に対してした良いわざについてであり，この人がどうしていやされたかについてであるなら，あなたがたご一同も，またイスラエルの人々全体も，知っていてもらいたい。この人が元気になってみんなの前に立っているのは，ひとえに，あなたがたが十字架につけて殺したのを，神が死人の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのである。このイエスこそは「あなたがた家造りらに捨てられたが，隅のかしら石となった石」なのである。この人による以外に救いはない。わたしたちを救いうる名は，これを別にしては，天下のだれにも与えられていないからである。』」（使徒４：７—12）



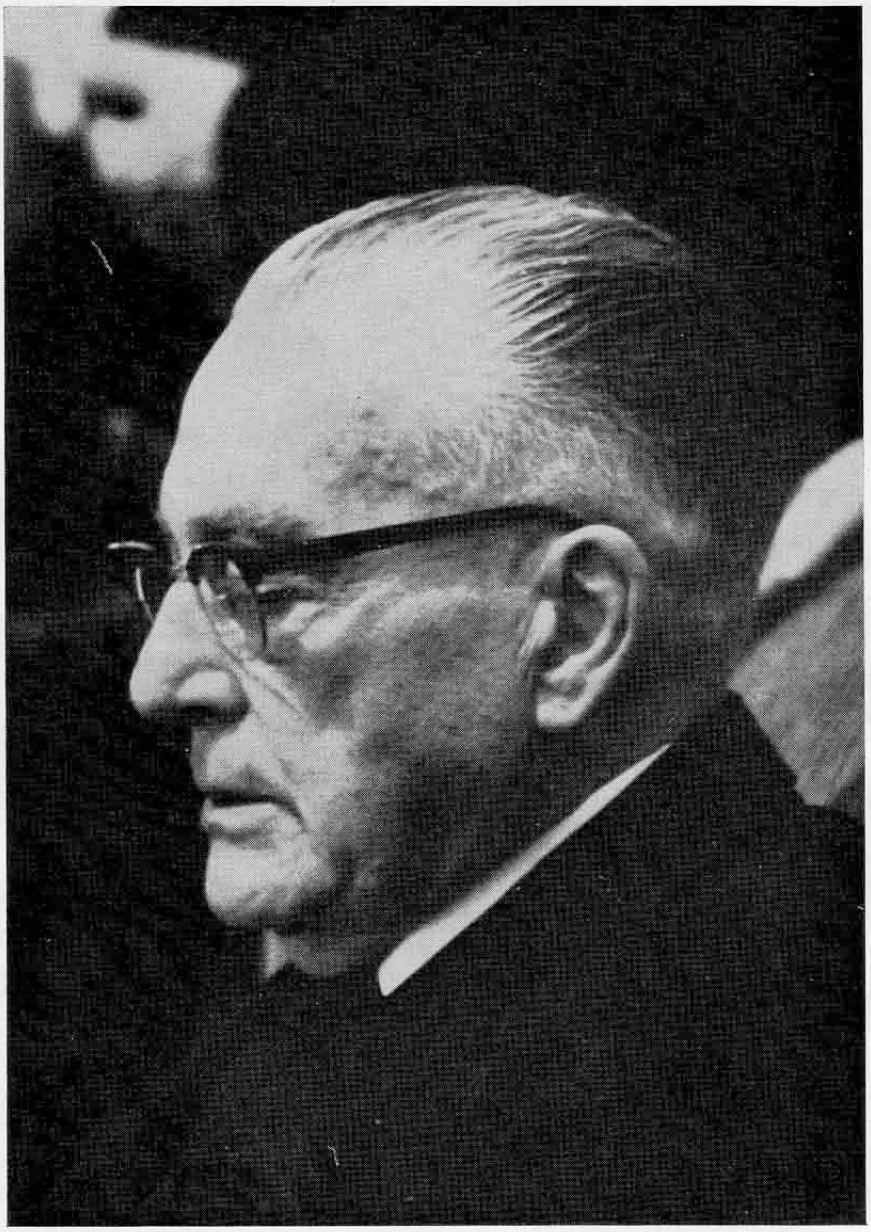


1973年
ミュンヘン地区総大会

私たちが第一に望むところは、たとえ教会の本部からいかに離れた地に住まうとも、教会員は忘れられてはいないことを証明することである。教会幹部は皆様方について心から関心を抱いており、教会本部の近くに住まう会員たちに対すると同様の気持をもって皆様方のために働いているのである。

——ハロルド・B・リー大管長——

リー姉妹



私たちは全世界の会員たちに、バプテスマのときに交わした誓約に忠実であるように、また、いついかなるときも、いかなる場所にあっても、たとえ死ぬまでも神の忠実な証人としての立場を守るように説いてきた。それは、人々が皆様方の良き行ないを見て天の父の栄光のもとに来る、すなわち、イエス・キリストの福音を受け入れるようになるからである。これは人々を救いに導く神の力である。

——ハロルド・B・リー大管長——

1973年8月25日から26日までの3日間、ドイツのミュンヘン・オリンピックパークで、教会の第3回地区総大会が開かれた。この大会には大管長会をはじめとする教会幹部が出席し、タバナクル聖歌隊も「音楽とスポークンワード」の録音ならびに日曜日の午前の大会での合唱のためにその地を訪れた。また地方の指導者にも、祈りや説教の機会が与えられた。

今回の大会はヨーロッパ大陸で開かれた最初のものであり、さらに6つの異なった言語を話す欧州8ヵ国の聖徒たちが出席したことも従来と異なっていた。参加国は、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、オーストリア、スイス、イタリア、スペインである。

「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」（マタイ17：4）変貌の山でのすばらしい出来事に際してペテロが語ったこの言葉は、ミュンヘン地区総大会に出席した人々の言葉でもあった。日曜日午後の最後の大会が始まる少し前に、ある会員が「私たちはこの大会で偉大な霊のほとばしりを味わいました」と感想を述べていた。事実その通りであった。ヨーロッパの

聖徒たちは「ミュンヘン地区総大会」のことを末長く語り続けることであろう。

大会は金曜日午後の青少年の活動で始まり、バレーボールと卓球の決勝戦が行なわれた。金曜日の夜には、各地からの青少年が、スポーツホールに集まった熱心な観衆を前にしてロードショウ、フォークダンス、フォークミュージックを発表した。

土曜日の朝から、リー大管長管理のもとに一般大会が始まった。土曜日の夜にも、教会幹部と地方の指導者の臨席のもとに、姉妹と神権者のための会が開かれ、それぞれの務めに関する指示と、激励と勧告の言葉が与えられた。

ミュンヘンの大会で特に著しかったのは、音楽の質が優れていたことである。大会での合唱のために、ふたつの大きな聖歌隊が組織された。その名が示す通り、大会の開催された地域内の

（左から）十二使徒地区代表のジェイコブ・デ・ジャガー、チャールズ・ディディア、F・エンツィオ・ブッシュ、スイス神殿長のイモ・ルシン・ボネベングルース

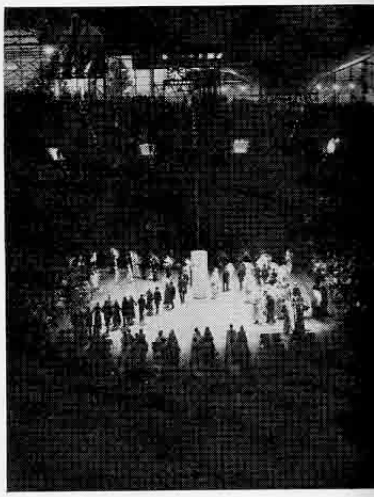
地元の神権指導者と言葉を交わす会員

南北両地区でそれぞれ南部聖歌隊と北部聖歌隊が編成された。聖歌隊のメンバーは数ヵ国に及んだため、リハーサルは週に１、２度ステーキ部または地方部の聖歌隊メンバーが集まって地方部ごとに行なった。このために、会員は多大の犠牲を払っている。

例えば、(オーストリアの) ビエンナ第１支部の会員は、当時教会堂建築のために働き、犠牲を払っていた。そして、支部で棟上げを祝うパーティーを計画していたちょうどそのときに、リハーサルが予定されてしまった。しかし、その支部の聖歌隊のメンバーは、リハーサルに出席する方を選んだ。それが彼らの務めだったからである。ある隊員はそのときの模様を次のように語っているが、これは全員の気持を代表したものであろう。「私たちは歌を学んだばかりでなく、より強く一致し、お互いをより深く愛するようになりました。また、福音を音楽で歌い表わすことにより、私たちは福音から喜びを得ました。そして、私たちの証はとても強くなりました。それは、ミュンヘンでの大会に私たち自身を備えるすばらしい方法でした。」

聖歌隊のメンバーやそのリーダー、伴奏者が犠牲を払い、一生懸命に働いたことは明らかである。出席した人々もその大会での音楽は最も印象的であったと口々に語っていた。

他の地区総大会の場合と同様に、一般の会員も犠牲を払い、また時には出席するために大きな信仰を示さなければならないこともあった。大会の直前に病気になり、神権による祝福を受けて出席できるようになった人々も何人かいた。ある兄弟などは、医者から死を予告されるほど重病であった。しかし長老たちから祝福を受け、大会に出席できるほど丈夫になった。医者は、彼の回復について何ら医学的な説明を加えることはできなかった。さらに盲目で身体のとても弱いもうひとりの兄弟は、主治医から許可を得て、彼のス



スポーツ、ロードショウなどの催し物も大会に花を添えた

テーキ部の３人の医者と共にこの大会に出席した。

また、多くの人々は出席するために財政上の犠牲を払わなければならなかった。金銭以外の理由で出席できなかった幾人かの会員は、必要な費用だけがないために行けない人々に援助を与えた。必要な費用を得るために内職をした70歳の老婦人もいた。大規模な資金調達プロジェクトを行なったという報告はひとつも届いていない。彼らは特別な事業を起こすことなく、ある者は残業し、また副業をもち、人知れず他の人々を助けたのであった。そのようにして予言者の言葉を聞くために集まったのである。

かくも多くの異なった国から来た人々に、大会はどんな影響を及ぼしたであろうか。日曜日の最後の会が終わったとき、その会で合唱した南北の合同聖歌隊は、もう一度「神よ、また逢うまで」を歌った。多くの人々の目には涙がとめどなくあふれ、教会幹部の目にも涙が浮かんでいた。様々な国々、時には敵となった国々から、福音の兄弟愛で結ばれた会員たちが集まり、そこで「みたま」によって与えられる心の熱いものを共に喜び合ったのである。

ある地方の神権指導者はこのように語った。「会員は、ここに来たときと同じ状態で帰ることはないでしょう。多くの人々は、２、30名しか出席者のない小さな支部から来ています。彼らは他の地から集まった15,000名にも及ぶ忠実な聖徒たちと一緒に大会に出、また予言者や教会幹部に会ってその言葉を聞くことにより強められています。」

世の人々に教会のことを知らせるだけでなく、国に帰って王国を築きあげようという決意を会員に植えつけた点でも、今大会は伝道の効果を十分にあげていると、ある伝道部長は語っている。大会に出席したことは、本当にすばらしいことであった。

通訳者

ミュンヘン地区総大会の備え

ミュンヘンで開かれたような大会を計画するにあたっては、宿泊施設、座席、保安、通信等、多くの大切な問題が伴うものである。その規模は、翻訳上の問題からも推し測ることができる。6つの異なった言語地域からの出席者がいるときに、あなたならどのようにして各人が自国語で大会の説教を聞けるように調整を図るであろうか。

翻訳に関するチャレンジは、独特な方法で達成された。大会の公用語がドイツ語であったため、ドイツ語は常時マイクを通して放送された。(会衆の約3分の2がドイツ語を理解した。)すなわち話し手がドイツ語以外の言葉で説教するときには、ドイツ語通訳者がその傍らに立って、逐時通訳（話し手が少し話して間を置き、その間に通訳をするという形式）を行なったわけである。そして両方の言葉がマイクを通して会衆に流されたのである。

他国語の会員たちは、階下の一室にいる通訳者による説教の通訳をイヤホーンを通して聞けるようになっていた。またその同時通訳は、無線でメインホール中に放送された。そのため非ドイツ語の各会員には、イヤホーンと小型

無線受信機が渡された。その受信機は希望の言語に放送のチャンネルを合わせて、各人が自国語で大会の経過を聞きとることができるものであった。

問題が予期しない方法で解決されたことを示す良い例がある。タバナクル聖歌隊は「音楽とスポークンワード」の定期番組の録音をスポーツホールで行なう予定であった。しかし聖歌隊の伴奏に使える適当なオルガンがそのホールにはなかった。現にミュンヘン中のどこにも、ホールに運べ、しかも満足できるようなオルガンはなかったのである。しかし、オルガンを準備する仕事を割り当てられた兄弟は、ミュンヘン近くの小さな村に住むあるオルガン製作者をどうにか捜し当てた。彼はパイプオルガンとほとんど同じ音色を持つ電子オルガンを製作していたのであった。

その依頼を受けた彼は、喜んで教会にオルガンを使用させてくれただけでなく、無償で設置し、使用させてくれたのであった。

十二使徒評議会会員
トーマス・S・モンソン

自由意志の3つの面

私は自由意志の持つ3つの面についてお話したい。それは選択の**権利**と選択の**責任**と選択の**結果**である。知恵と愛に満ちた天父が私たちに自由意志を授けられたことを，私はいかに感謝していることか。かの初めに，天父はアダムに自由に食べてよい園の木を教えたあと，1本の木を指してその実は食べてはならないとされた。そしてこう言われた。「……然はあれども，食うと食わざるとは汝に任す，そは汝に与えられたればなり。……」（モーセ3：17）

私たちには選択の権利が与えられている。ウイリアム・C・グレッグはそれを詩に表現した。

「汝知らずや，人みな自由なるを
人生を選び，己が行く末を選ぶ
とわなる真理与えられたれば
神，人を天に強いたまわじ

知恵と愛と光もて
説き，勧め，正しく導き，恵みたもう
はかり知れざる善とやさしさ
しかれども人に強いたまわじ
（英文讃美歌90番）

私たちは選択の責任を持っている。私たちは中立ではいられない。中間的な立場は存在しないのである。主はそれを知っておられ，ルシフェルもそれを知っている。人の心には大きな葛藤がある。一方では，ルシフェルが自分の道路標識を美しく塗り立てている。あなたはそれを見たことがあるだろうか。気のきいた心をそそられる標識である。うたい文句はこのようである。「飲み食いして楽しめ，われらはあす死ぬかもしれない」，「みんなのやっていることだ」，「たった一度だけだ，どうということはないだろう」。

もう一方で，主は私たちを導く標識を用意しておられる。そこには「人は自分のまいたものを，刈り取ることになる」（ガラテヤ6：7）と書いてある。

「そもそも創世の以前より天に於て定められたる一つの変らざる律法ありて，あらゆる祝福はこれに基くなり。すなわち，われら何にても神より祝福を受くる時は，この祝福の基く律法に従うによりて然るなり。」（教義と聖約130：20，21）

私たちはこのふたつの道のいずれかに従う。すなわち，選択の責任が与えられているのである。

英知を授けられた人々は，危険を予知する数々の安全装置を発明した。私が合衆国海軍に入隊した頃は，水中電波探知機が開発されたばかりであった。経験者は御存知と思うが，この探知機は船舶その他の障害物を発見するための装置で，音波を受信する。操作員は反復される信号を聞き慣れていて正常でない信号が入ると危険が近づいていることを知り，それを伝達して航路を変える。

人間が惨事を避けるための探知機を発明できるならば，主が大切な子らの中に，子らが道をはずれて遠まわりをするのを避けるための同じような警告装置を置かれることはもっともなことではないだろうか。私たちがそのような案内灯を持っていることを，きょう証申し上げたい。それは使いさえすればいい簡単なものである。私が言うのは静かな細い声，すなわち聖霊のことである。

「しかし，助け主，すなわち，父がわたしの名によってつかわされる聖霊は，あなたがたにすべてのことを教え，またわたしが話しておいたことを，ことごとく思い起させるであろう。」（ヨハネ14：26）

選択の権利および責任に加えて，その結果をも考慮しなくてはならない。

私は18歳の誕生日を間近にしたある日のことを思い出す。皆がひどく恐れていた。第二次世界大戦中で，青年は皆選択しなくてはならないことを承知していた。選択の自由はわずかしかなかった。陸軍に入るか海軍に入るかのどちらかだった。私は海軍に応募した。

徴募事務所には44人の青年が並んだ。上等兵曹長たちがやってきて，選択の結果を聞いたときのことを私はよく覚えている。彼らはこのように言った。「では，君たちは大切な選択をしなくてはならない。ひとつは，賢明に正規の海軍入隊の選択をすることである。4年間入隊し，高度の教育を受ける。海軍が身柄を請け負うのでいろいろな機会がある。これに入りたくない人は海軍予備隊に編入される。予備隊に対して軍は，現段階ではあまり関心を抱いていない。従って教育は何も受けず，海上勤務につく。将来どうなるかはだれも知らない。」

それから点線のひいてある上にサインをするように言われ

た。私は父を振り返り，「どうしたら良いだろう」と聞いた。

父は思いが胸にこみあげてきて，声をつまらせながら，「わたしは海軍のことは何も知らない」と言った。その日その場にいた父親はだれもが同じ思いだった。

44名のうちの42名が4年間の正規軍を志願した。43番目の人は身体検査ではねられ，予備軍に登録された。

それから私の番が来た。正直に申し上げると，私はなすすべを知らず，ただ天父に祈りを捧げた。主はそれに答えられた。まるで声を聞くようにはっきりとひとつの考えが心に浮かんだのである。「上等兵曹長はどちらを選んだか聞きなさい。」

私は経験豊富な上等兵曹長にひとりずつ尋ねた。「あなたは正規軍と予備軍のどちらを選びましたか。」

彼らは皆予備軍を選んでいた。

私は振り返って言った。「皆さんの経験と知恵を信頼して同じ軍に入りたいです。」

私は予備軍を選んだ。そのために戦争が続いたあとの6カ月間私はただ登録されたままだった。戦争は終結し，それから1年以内に私は名誉ある除隊をした。学業を続けることができ，教会で多くの責任に携わる特権を得た。もしあの瞬間に，ある人にとってはささいな決定に思えたかもしれないことについて，天父の導きと教えを求めていなかったとしたら私の人生がどう変わっていたかをだれが知ろう。

賢い選択を教えられたある宣教師の話を御紹介したい。彼は伝道に出たばかりで，カナダのオンタリオ郡オシャワ市でベテランの宣教師と組んで働くように言われた。彼らはポラードという家を訪れた。ノックをするとポラード氏は彼らを招き入れ，紹介して下さいと言い出した。宣教師の話を聞き終わり，共に祈ったあとで，悪霊が来たらしく，彼は長老たちを叱りつけ，出て行け，二度と来るなと言った。彼はドアを指さしながらこう言った。「どうせ君らはジョセフ・スミスが神の予言者だなどと，心底信じているわけじゃないだろう。」ドアはばたんと閉められた。ふたりの宣教師はがっかりして立ち去った。

若い方の宣教師が先輩の宣教師に向かって言った。「私たちはポラード氏の質問に答えませんでしたね。」

先輩宣教師は引き返すことの無駄を説いて聞かせた。しかし若い長老は言った。「もう一度行きましょう。そうしなくては気がすみません。」

彼らはポラード家に引き返し，ドアをノックした。ポラード氏がドアをあけて，「君たちには帰れと言ったはずだが」と言った。

次の決断には，その青年の全精神力と持てる限りの勇気が必要とされた。先輩宣教師が彼をあまり助けてくれなかったからである。私はポラード氏自身からそのときの説明を聞いた。彼はこのように語った。「あの宣教師は私の目を見つめました。一瞬ためらいましたがこう言いました。『ポラードさん，私たちがお宅を去るときに，あなたは私たちがジョセフ・スミスを神の予言者だと本当に信じてはいないのだとおっしゃいました。ポラードさん，知っていただきたいと思います。私はジョセフ・スミスが神の予言者で，この御業が真実であることを知っています。』」

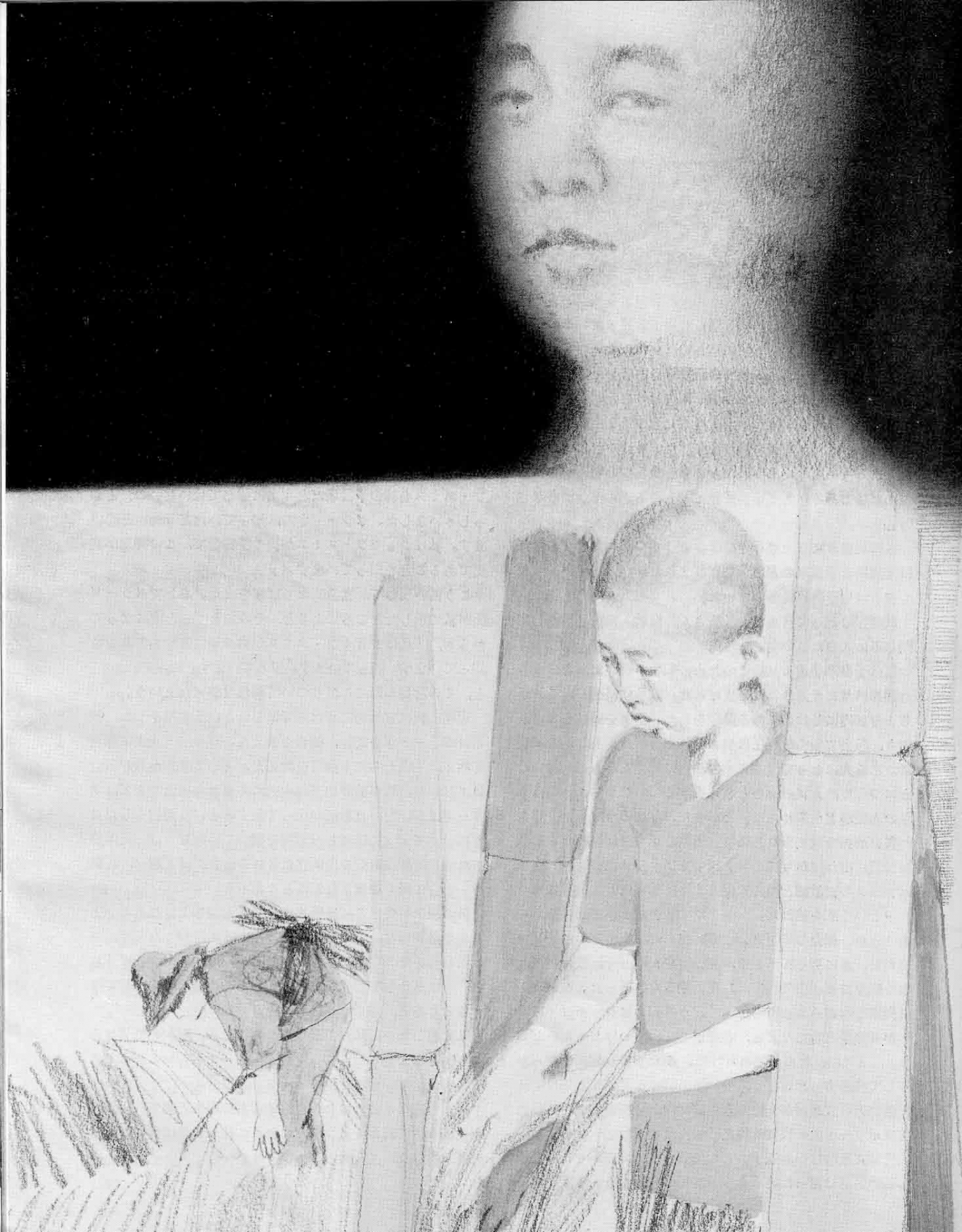
こう言い残して，宣教師たちは家を出た。あとでポラード氏が私に話したところによると，そのあとずっと夜になってからも，「私はジョセフ・スミスが神の予言者であることを知っています。知っています。知っています。知っています」と，その言葉が耳にこびりついて離れなかったという。

翌朝，彼は宣教師にまた来てほしいという電話をした。彼らはポラード家を訪れ，福音を教えた。ポラード夫人に福音を教え，子供たちにも福音を教えた。そして家族全員が教会員になった。数年前の地方部大会にあなたも出席できて，ポラード氏が，若い宣教師が戻って証するという選択をしたことについて天父に感謝した言葉を聞いていたならば，兄弟姉妹たち，皆様は選択の場に立たされるときには「選べ，正義を」と心に固く決意されたことであろう。

神の祝福を受けるには間違いを少しも犯してはならないと考える必要はない。私たちが主のみもとに近づくならば，主は私たちを今の状態から，さらに高い状態へと引き上げられる。主は私たちを霊的に高め，私たちを信頼して強くして下さるのである。

私は証したい。私たちが正義を選ぶとき，選択の結果は心に喜びと幸せをもたらす。主がこう言っておられるからである。

「……主なるわれはわれを畏るる者に恩恵と憐みとを与え，終りまで義しく且つ真実にわれに仕うる者に誉を与うるを喜ぶ者なり。」（教義と聖約76：5）



いそがず歩きな

ミルドレッド・バーセル

サン・リンは自分の身のまわりのものをまとめながら，こざかしげに独りごちた。「わしはもう親父よりも背が高い。家を出て，出世して帰ってこよう。」

彼は母親が焼いた菓子を少しナプキンに包み，ずだ袋を大事そうに背負った。そして父親に深々と頭を下げ，母親に別れのあいさつをし，弟妹の肩に手を置いて言った。「わしが戻って来るまでに，もっと大きくなっているんだぞ。」

サン・リンの家のある小さな村から，まる一日歩くと海だった。海に向かってひたすら歩きながら，彼は考えた。海の近くに住んで海で働こう，そして海と友だちになろう。彼は自分の住んでいた村を振り向こうともしなかった。「わしはもう子供じゃない。前進あるのみだ。」

ひとりの漁師が，腕前を証明して見せてくれるまで給金は払えないが，うちで働いてみるかい，とサン・リンに口をかけてきた。

「きょうも，あしたも，いやこれからずっと，どっさり魚をとってごらんに入れましょう。」サン・リンは自分の熱意に海も報いてくれるだろうと確信して言った。

「結構だね。わしは一昼夜沖合に出て漁をするから，お前さんは沿岸で漁をしてくれ。網は舟の中だ。」漁師はそう言い置いて出かけて行った。

サン・リンはほくほくしながら，漁師の後姿に頭を下げた。ところがその夜，少しの漁をあげて眠っていると，夜中に大風が吹いて，舟が流されてしまった。注意してしばっておかなかったので，とも綱がゆるんでしまったのだった。

翌日，彼は海に向かって石を投げながら不平を言った。「風が吹いたのは，わしのせいじゃない。」

それを聞いて漁師は腹を立てた。サン・リンはため息混りに言った。「海がわしの友だちと言えるほどには漁はなかったが，あしたはどっさりとってみせますよ。」

「海は友だちなんぞいらないとよ。だがわしにはあの舟がいるんだ。」漁師は，そう言って彼をあざけった。

サン・リンは漁師の言葉を聞き流し，黙って頭を下げた。

「わしの腕を発揮できるところが，どこかほかにあるはずだ。」そう考えながら彼はずだ袋を背負い，新しい道を歩き始めた。しばらく歩くと，父親の農場を思い出させるような，畑のかたわらへ出た。

「アハハ，これなら，友だちもへったくれもないわい。」サン・リンは思った。彼はお百姓に言った。「わしは親父より背が高くなるまで，親父と一緒に働いていました。」

「うちで働いてみなさい。どの位仕事ができるかみせてもらおう。」

サン・リンはずだ袋を木の下におろし，お百姓から1ちょうの鍬を受け取った。彼は鍬を振り上げながら，わざとお百姓に聞こえるように言った。「明るいうちに，草を全部とってしまうかあ。」

お百姓とサン・リンはしばらくの間よく働いた。それから

「お若いの，
これはお前さんの手には負えないよ。
わしが作るのを見るんだな。それで，
お前さんがガラス工芸の極意を習いたいと思うのなら，
契約しよう。わたしは公平で正直な人間だ。」

お百姓は自分の若い息子を一緒に働かせようとして呼びに行った。そして戻って来てみると，サン・リンは木の下で休んでいた。

「どうして途中で止めるんだね。まだ明るいし，草はいっぱい残っているじゃないか。」お百姓は小言を言った。

「ちょっと一休みです。」サン・リンは言った。

鍬を取り，また仕事にかかりながらお百姓は言った。「お前は親父と働いていたとき怠けていたな，まだ一日とたっとらんが，わしにはわかる。」

サン・リンは笑いながら弁解した。「親父は，わしが怠けているとは言いませんでしたよ。勉強していると言っていましたっけ。」

お百姓は夕陽をながめながら言った。「勉強に給金は払えん。親父さんのところへ帰って，勉強を終わらせてから来るんだな。」そしてお百姓は，かたわらで働いていた自分の息子に熱心に教え始めた。

生まれ育った村からますます遠く離れて，サン・リンは人家の明かりのないところまで来てしまっていた。ずだ袋を枕がわりに，地面に横になると，彼はあお向けに空をながめながら，こう独りごちた。「とにかく成功を目指して進もう。なあに，勉強の期間なんて，そう長くはないさ。」そして，彼は眠りに落ちた。

夜明け頃だった。ひとりのガラス吹きの職人が道を通りかかった。彼は自分の小さな店へ行く途中だったが，若いサン・リンが道端で眠っているのを見て，不思議に思って立ち止まった。サン・リンは枕もとに人の気配を感じて目をさました。「正真正銘，わしは一生懸命働きますよ。」彼は熱心に頼んだ。

店に着くと，ガラス吹き職人は，サン・リンに精巧な杯を取り出して，注意深く回してみせた。太陽の光がそのガラスの中で楽しそうに踊っていた。

「お若いの，これはお前さんの手には負えないよ。わしが作るのを見るんだな。それで，お前さんがガラス工芸の極意を習いたいと思うのなら契約しよう。わしは公平で正直な人間だ。」

何度も何度も，サン・リンは熱いガラスにいどんだ。しかし，サン・リンの作ったものには太陽の光は踊らなかった。彼は絶望して目を伏せ，つぶやいた。「まただめだ。3カ月も経つのに，ちっとも腕があがらない。」

ガラス吹きの職人は，彼を元気づけるように言った。「あすもう一度やってみよう。」

サン・リンは嘆いた。「わしにも，あんたほどの腕があればなあ。」

「これを覚えるにや年期がいったのさ。しんぼうするんだな，お若いの。もっともっと時間をかけて教えてやるよ。わしは公平な人間だから。」

ある日，サン・リンの手から美しく輝く小さな花びんが生

まれた。ガラス吹きの職人は明かりの下でそれを静かに回してみた。

「これは売物になるかもしれない」と彼は言った。

それから1週間というもの，サン・リンは店に出入りする客をじっと見ていた。銅貨がガラス吹き職人の前かけのポケットに落ちる音を聞きはしたが，だれひとりサン・リンの作った花びんに注意を払おうとはしなかった。悲嘆にくれて彼はこう考えた。「わしの作品には，人が欲しがるほどの美しさはないんだ。」彼はガラス吹き職人のもとに行った。

「わしは長いこと養ってもらいました。あんたは熱心に教えてくれたが，あんたにもわしにも何の得もなかった。」

老人は若者の腕にやさしく手を置いて言った。「労働というものは，時としてはそれ自体が報酬なのだ。わしは報酬がなかったとは決して思ってはいないよ。まだまだやることはいっぱいあるし，それに，わしらは嘆きながら働いてはいけないのだ。」

しかしサン・リンは働くことができなかった。彼は客が主人の作った美しいガラスの器を買い求め，自分の作品が空しく置かれているのをじっと見ていた。

ある日ガラス吹きの職人はつくづくと言った。「お前さんの父親は夜明けに起きなかったかね。」

「知りませんね。」サン・リンはそっぽを向きながら，いらだたし気に答えた。

ガラス吹き職人は，しばらく黙っていたが，さとすように言った。「もしお前さんが父親のやり方を知らないのなら，家へ帰って，じっくりと……。」

今まで，サン・リンは主人に口答えをしたことはなかったが，彼は抗議の声で叫んだ。「わしは親父の仕事などしたくはありません。親父はただの百姓ですよ。」彼は意味もなく腕をたたきながら行ったり来たりした。

「わしはただ，お前さんに親父さんの成功の秘訣を会得してもらいたいだけなのだ」とガラス吹き職人は言った。

サン・リンはガラス吹き職人の言葉をいぶかしく思いながらも心にとめて目を伏せ，一礼して別れを告げた。翌日の昼頃，サン・リンは自分が生まれ育った村へと歩いていた。「親父は親父だ。わしは親父のやり方など知らない。親父の習慣など気にもしていなかった。親父はわしが起きたときにはもう畑へ行っていたし，眠るときになってもまだ帰って来なかった。」

さまざまな考えが彼の足を早め，眠けをさまさせた。そして彼は歩きながら，幾度となくつぶやいた。

翌日の夕暮れ，サン・リンは，なつかしい畑に近づいていた。「このあぜ道は前に歩いたことがある。」前方を見ると，父親が腰をかがめ，苗を大切に取り扱っている姿が，おぼろ気に見えた。

三度目の植付けを終えた印が，きれいに仕上げられた畝の端にひるがえっていた。サン・リンは，地平線が静かに夜のとばりに暮れて，父親が疲れた足を引きずって夕食に家へ戻るのをずっとながめていた。

「姿を見せるのは，少し休んでからにしよう。」サン・リンはそうつぶやきながら，ずだ袋を小さい頃から慣れ親しんだ木の下に置いて眠った。

夜明け前に，鶏がときをつくるのをやめた。サン・リンは調子のよい歌声と，鍬のさくさくというリズミカルな音で目を覚ました。身を起こすと，もう父親は最初の畝の半分ほども仕上げており，かたわらには，雑草の小さな山ができていた。朝露がまだ野菜についていて，その美しいきらめきが，サン・リンの心にしみた。

父親の満足気な歌には，喜びすらこもっていた。サン・リンはその歌詞を思い出し，見つからないように木蔭から見守りながら，父親に合わせて小声で歌った。

早朝の陽の光は，しばし立ち止まってきれいに仕上がった畝を数えながら，満足気にほほえむ父親の顔を明るく照らしていた。サン・リンは身を隠しながら，何度も自分に言い聞かせた。「まだ会いに行くのはよそう，もう少したってからにしよう。」

やがて陽は高くなり，父親は木蔭にやって来てひしゃくから水を飲み，ささやかな昼食をとった。

短い休息をとってから，父親は再び鍬をとって働き始めた。そして，ひとつ畝を仕上げるごとに，先に色紙を無雑作につけた棒を注意深く立てた。父親は体をゆるやかに動かしてリズムをとりながら，黙々と着実に仕事を進めていった。

サン・リンは父親の働きぶりを木蔭からじっと見守っていた。そこは子供の頃，仕事を怠けて隠れたところだった。彼は，胸に忍び寄る，どうしようもない恥ずかしさから逃れることができなくなっていた。「わしはただぼんやりと大人になってしまったんだ。」彼は嘆いた。彼は，小さな舟の手入れをしている漁師，若い息子に教えているお百姓の姿に思いをはせた。そして彼は，熱いガラスを吹いて器を作っているあの忍耐強いガラス吹き職人のことを考えた。サン・リンは，父親が何年も丹誠こめて作りあげた畑の美しさを見るに耐えられなくなって，両手で顔を覆った。

間もなく彼は，父親がその日の仕事を終えようとしているのに気づいた。サン・リンは木蔭を離れ，だれにも見られていないのを確かめて，もと来た道をひき返した。

「あすの夕方，まだ明るいうちに，あのガラス吹き職人の店に着くだろう。」そう思いながら，サン・リンは大股で歩いていた。

バーセル姉妹は，主婦であり7人の子供の母親である。アイオワ州セダーラピッドステーキ部，セダーラピッドワード部に属している。

豊かな知識を身につけるには

ブジェーン・クリスチャンセン
絵：マービン・フリードマン

軍隊に入って3日しかたっていないのに，私はもうホームシックにかかっていました。

最新版の小さいオリーブ色のモルモン経を読んでいたそんな私に，やさしそうな顔つきの仲間の兵士が声をかけてくれたときの喜びを想像してみて下さい。

「やあ，君はモルモンかい？」

「そうだよ。君も？」

「いや，ちがうんだ。ただずっと前からモルモンの人と話したいと思っていたんだ。話してもいいかい？」

その言葉に私の胸は躍りました。私はつい最近改宗したばかりの新会員で，福音を分かち与える機会を待ちこがれていたのです。

「何を知りたいの？」

数分してから，私は教会のことについて話さなければ良かったと思いました。この人はコロンビア大学で哲学の修士号を取った人だったのです。ですからとうていかないっこありません。彼は知識のない私を徐々に攻め始めました。

「君の信じている神が実在するという証拠があるのかい？」

「いや……でも……」

「神が本当に慈愛深くて全人類に関心があるのなら，どうして戦争や飢えのために苦しまなきゃならないんだい？」

「いや……それは……つまり……」

私の答えは，まわりを遠巻きにしている同じ兵舎の仲間たちの笑い声にかき消されてしまいました。おそらく私の答えが不十分だったのでしょう。30分ほどして，すっかり笑いものにされて何が何だかわからなくなった私は，二度とこんな目には遭うまいという悲痛な決心のもとに，傷をいやしにベッドに戻りました。

程度の差こそあれ，また軍隊の中ではないにしても，教室や友だちのいるところで同じような経験をしている末日聖徒の若者が多くいることでしょう。

今日，私たちは自分の信仰を全力を尽くして支え守っています。しかし私たち教会員が高く掲げているあらゆる理想は疑いの心を持つ人々に巧みに攻撃されています。教会の根本原則を，家族の一致を，私たちの生き方を，そして一般的に宗教というものを彼らは批判しています。新しい道徳が叫ばれ，騒々しいマスコミや政治運動がはんらんし，自分の考えを言葉巧みに押しつける教師のはびこる現代ほど，誤った理論を見きわめる力が強く要求される時代はありません。

クラスの討論会や個人的な会話の中で，あなたの生き方やあなたが正しいと考える言動にまっこうから反対された場合あなたはあくまでも自分の考えを押し通すことができますか。最近，マリオン・D・ハンクス長老はこのように言われました。「神は，私たちが世界中で最も知的なすぐれた思想家と肩を並べ，しかも自分自身の考えを維持できるように望んでおられる」と。

とてもできそうにないことのようですが，考えるほどむずかしいことではありません。

自分と真実を混同しないこと

本や雑誌にある絵の中にさらに他の絵がかくされているような絵が出ているのを見たことがありませんか。いったんかくれている絵を見つけると，それは前からそこにあったように（もちろんそうなのですが）はっきりと見えます。でもはじめからそうはっきり見えるわけではありません。

真理についても同じことが言えます。しばしばそれは巧みな装いをしているので，私たちはその核心に触れるために外面をおおっているものを取り除かなくてはなりません。その外皮を取り除く方法は質問をすることです。何度も何度も質問することです。核心に触れるためだけでなく，はっきりと断定し，それを守るためには積極的な気持を持つことも必要です。逆に相手に質問をすることによって，防御的になったり言いなりになることから免れることができます。

かつて大学の心理学のクラスに出席したとき，教授が「神の存在を信じるのは非科学的である」と言ったことで宗教に関する問題が持ち上がりました。その結果，クラスの人々は宗教などというものはごまかしであると結論づけました。

私はかっとなりましたが，軍隊での経験がまだありありと私の脳裏に残っていたので，あえて口出しはしませんでした。すると後ろの方にいたある学生が，教授に質問をしました。「宗教が良くないと思われる確かな理由は何ですか。」教授は，宗教戦争や異端者弾圧，教会の富と多くの国々の教会員の貧困などありきたりの理由を並べました。「○○教授のお考えはよくわかりますが，現在1,200以上ものキリスト教の宗派があることを考えますと，少なくともいくつかは価値あるプログラムを持つ教会が存在するという可能性を認めることはできないでしょうか。」教授は，その可能性を認めざるを得ませんでした。彼はそのように多くの宗教があることに対しての思いつきの知識さえ持ちあわせていませんでした。

次の質問はさらにショッキングでした。「○○教授，あなたの宗教的背景はどうですか。どの程度の宗教教育を受けられたのですか。」その答えは明らかでした。教授はたいした宗教教育を受けていませんでした。「とすると，心理学と違

って宗教の分野は専門ではないわけですね。」私を含めて何人かの生徒が深いため息をつきました。教授はいやおうなしに自分の専門分野ではないことを認め，自分の述べた意見は個人的なものであったことを告白しました。話合いはたちまち心理学のことに戻りました。

これで要点が明らかになりました。教授は自分が宗教の専門家でないことを認識しましたし，私たちもそれに気づきました。さらに教授は，私たちがそう気づいたことを知ったのでした。私はうれしさのあまり「バンザイ」と叫びたい気持でした。

これは，自分の考えと一致しない教師や教授にはすべて反論すべきだといっているのではありません。正しい知識を持ち正直であるなら，意見が違っていても恐れないで下さい。

大切なことは，言葉巧みな意見に全く動じずにいることやそれらをすべて知ることはできなくても，すべてに共通する事柄を知るように努力できるということです。その教授は，正しい思考法に照らして考えてみると，次の最もありふれた５つの誤ちに考えの基を置いていたのです。

１．誤った仮説

この教授は，あなた方が出会う他の大勢の人々と同様に，史実，戦争，良くない指導者，日曜日に教会に行っていながら不謹慎なビジネスマンなどと宗教は両立しないというような非論理的な推論をしてきたのです。

彼の知る宗教にみな上記の事柄があてはまるという理由で彼はすべての宗教が間違っていると考えたのです。

おそらくあなた方も同じような方法で論理づけをしたことがあるでしょう。私たちは，しばしばこの方法をとっています。

その考えは，もちろん教授自身の経験から得たものです。その経験には何らかの前提となる根拠があったとしても，前提と真理を混同するのは間違っています。ある正しい根拠に基づいているという理由で物事の真実を確信する人がよくいます。そのような人々は根拠というものが必ずしも真実ではないことを理解していないのです。

この種の論理づけは，政治運動の際にも人々の注目を集めます。また品物やアイデアの宣伝にも見られます。酒を飲むのは違法ではない。マリファナも酒と何ら変わるところがない。それならマリファナは違法ではないという論理。あるいはマリファナがタバコよりも悪いという理由は，どこにもない。ほとんどの人がタバコを吸っている。それならマリファナを吸っても悪いわけはないという論理がそれです。

２　不正確または不完全な情報

教授に，私たちは次のような質問をすることもできたでしょう。「あなたの入手した情報は正確ですか。確認できますか。その情報は新しいですか。状況が変わっている場合だってあります。その情報は完全ですか。それは情報のほんの一部ではありませんか。」

このような質問はどんな問題に関するどんな話合いの場でも適用することができます。不正確で不完全な情報から，しばしば私たちは早合点するものです。

３．彼（彼女）は専門家だろうか

かの教授は心理学においては専門家でしたが，宗教に関してはどうだったでしょうか。専門家というのは，その分野で特別な訓練を受け，特別な知識と経験を身につけた人のことです。その分野において正確でなければならず，また偏見は捨てなければなりません。偏見を持つことは専門家として失格です。新聞雑誌特有の「ある一流の専門家はこう述べている……」などという表現は避けるべきです。専門家になるには，周囲からはっきりそう認められなければなりません。正確さの要求される化学や核力学の分野では特にそうです。

しかし問題が宗教や道徳，趣味，愛など厳密さを欠くものになると，証言は単なる意見と化してしまいます。教会に権威者が必要なのはそのためです。彼らは私たちにとって最高の霊的面での専門家です。歴史が示しているように，彼らなしでは真理の探求は不可能ではないにしろ，さらに困難になります。最もすばらしいのは，私たちに影響を及ぼす彼らの動機に心からの信頼を置けるということです。

４．伝統

デンマーク人の改宗者のジョンは，最近シオンの地に来て以来，20年ぶりで生まれ故郷に帰りました。家族に福音について話そうと期待に胸をはずませていたにもかかわらず，ど

こへ行っても同様の答えが返って来ました。「先祖代々の信仰で充分ですよ。」これでは手も足も出ません。

個人に限らず多くのキリスト教会が何百年も昔の解釈に従って福音を広めています。他の教会の人々の中には，伝統を福音の信条の基礎のように考えている人もいます。その良い例は独身生活です。ある神学者たちはそのような生活に関連する聖句を主張するわけでもなく，ただ単に伝統に従っています。

私たちの教授も間接的にその伝統というものに従って，宗教はすべてとるに足らないという意見を持ったのです。

もちろん腕ずくでも守り抜かなければならない昔からの原則もありますが，捨て去らなければならないものもあります。伝統というものはしばしば，人々が新しい真実を退けるために心にはめてしまう巨大な枷(かせ)となってしまいます。

5．すべてか無か

もし教授に，私たちの考えや話の中に絶対的な表現を用いることについて質問したら，彼はすぐさまこう答えたでしょう。「いつも」，「すべての」，「決して」，「必ず」，「明らかに」などの言葉や，「すべてのセールスマン」，「すべての人々」，「すべての指導者」そして（忘れてならない）「すべての宗教」などの一般化した表現は，私たちを堅苦しい自己防御的な存在にさせてしまうと。これは「すべてか無か」，「善か悪か」の論議に対しても同じことが言えます。

絶対的な真理というのは福音の中に学ぶように，白か黒かの問題ですが，それはしばしばいろいろな色彩を帯びることがあります。「すべてか無か」の意見は，全く妥当でない未熟な単一化を許してしまう結果に，しばしば陥ってしまいます。ひとつの問題に関して中道はないという見方を受け入れることは，強いて白か黒かを決めさせられることです。

「すべてか無か」という誤った議論も，政治家にとっては大切な一論法です。あなた方の友人も，この方法を用いています。たいていどんな物にも，あるいはだれにでも間違ったレッテルがはられているものです。物事を程度によって考えられるようにしましょう。

では，要約してみましょう。だれがあなたに何をさせたいのか，またそうすることによってあるいは従わないことによってどんな結果が生じるのか，これらを尋ねることによってあなたは窮地に陥るのを免れ，信仰を守ることができます。今述べた５つの事柄は，あなたが選んだ正しい道を守り抜かせてくれるでしょう。いったんそれらをすばやく見きわめることを覚えると，適切な質問が自然にわきあがり，完全に相手の言葉をとどめることでしょう。

形勢を一変すること

ある大きな大学に通っている最近改宗したばかりのビキッーは，ふたりのクラスメートから自分の道徳観をけなされました。賢明な彼女はそれが信仰の一部であると説明するかわりに，巧みに次のように反論しました。「あなたたちって，まるでどんなモラルにもふれたくないような言い方をするのね。そうじゃない？」そのふたりのクラスメートは，思いがけない突然の返答にとまどい，つじつまの合わないことをぶつぶつ言いました。さらに彼女は次のように言ってふたりを説き伏せました。「あなたたちはどんなモラルをも信じていないようだけど，私の知っている人たちは私が最近知ったすばらしい原則の中に新しい意義を見いだしているわ。そのすばらしい原則というのはね……」

適切な質問は相手の質問をとどめ，形勢を一変し，質問をした人に深く考え込ませるものです。ビッキーの返答はまさにこの良い例です。

特に会話が福音の原則に及んだ場合の接し方のテクニックは，こう尋ねることです。「本当に知りたいと思っているのですか，それとも単なる好奇心からですか。」どういうわけか，たいていこの質問によって，相手は真剣に福音のことを考えるようになります。

何を言ったらいいかわからなくなった場合は，常識を働かせて下さい。知らないからといってがっかりする必要はありません。それはまったく意味をなさない答えよりもましなことがしばしばです。もしわからない場合は，信頼のおける人に聞いて下さい。友人や両親や監督がわからなくとも，天父は御存知です。選択や決断をするときに，天父の承認を得ることを習慣としてはどうでしょう。

また，良い会話や話合いのルールがいくつかあります。議論を避けること。大声を出さないこと。これは大声を出す人の方が不利になります。相手の意見に反対するのは，相手に納得のいく反対意見が述べられるときだけにすること。笑顔を忘れないこと。これは相手に良い感情を考えるためです。機知に富むこと。話してから考えるのではなく，話す前に考えるように。自分の意見ばかりを主張したり，反対に他人の意見に譲歩してばかりいるのは避けなさい。自分の高慢な態度に気づいたら，すぐに自分を戒めること。自分の意見がさえないからといって，冗談ばかり飛ばして話合いの中心になろうとするのはやめなさい。口の中でぶつぶつ言わず，はっきりと声に出して言うこと。そして最後に，何度もくり返して質問することです。質問をされた場合は，質問をもって答えることもできます。最も大切なことは，できる限り多くの書物を読むことです。そうしなければ，決して**豊かな知識を身につける**ことはできません。

創造

モーセ2，3　　アブラハム4，5

はじめに，天のおとうさまと，御子イエス・キリストは地をつくられました。そのほかにはまだ何もつくられなかったので，地の上には何もありませんでした。そしてくらやみが地をおおっていました。

おふたりが「光あれ」と言われると光がありました。そして光とくらやみを分け、光を昼と名づけ，くらやみを夜と名づけました。

おふたりはまた，地の水の上に天をつくられました。

天のおとうさまと御子イエスはその水をひとつのところに集め，かわいた地があらわれるようにしました。そしてかわいた地を陸と名づけ，水を集めたところを海と名づけました。

それからおふたりは，地に草や木がはえるようにされました。

つぎに，天のおとうさまと御子イエスは，天に光をおいて昼と夜とを分けられました。昼をつかさどる光は太陽とよばれ，夜をつかさどる光は月とよばれました。月といっしょに星もおかれました。

天のおとうさまとイエスは海が大きなクジラや魚を生じるように，また空を飛ぶ小鳥を生じるようにされました。地は家畜や地をはうもの，そのほかすべての動物を生じるようにされました。

天のおとうさまは言われました。「われわれの姿に形どって人をつくろう。」そこで男と女をつくり、祝福されました。

7日目に，おふたりはすべての働きを休まれました。そして 7日目を祝福し，聖別されました。

作り方：

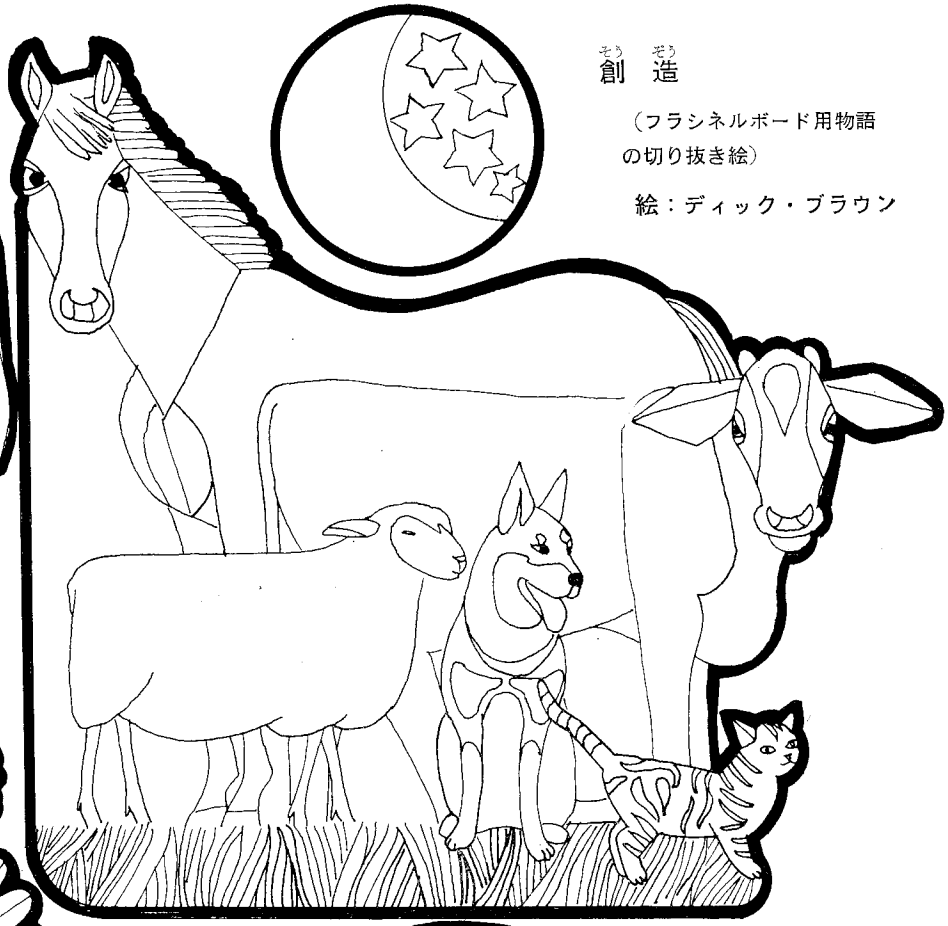
502 ページと 503 ページの絵にきれいに色をぬり、切り抜く。それぞれの絵の裏にフランネルをつけておくと，フランネルボードに簡単につく。暗い色のフランネルで直径25センチの円を作り、世界を示すのに使うとよい。半円の青いフランネルを暗い色のフランネルの半分に重ねて置き陸と海が分かれた様子を示すようにする。

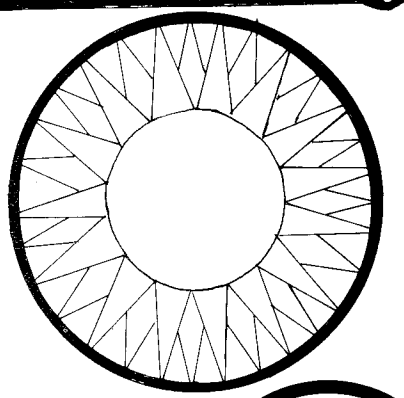
物語の進行に合わせて、絵をフランネルボードに置く。

創造

（フラシネルボード用物語の切り抜き絵）

絵：ディック・ブラウン





小さなお友だちへ

十二使徒評議員会会員
デルバート・
L・ステイプレー

ポケットナイフと野球

わたしが少年のころ，おとうさんは小さな町で金物屋をしていました。やがてふたりの男の人としたしくなり，おとうさんはその人たちといっしょに今までより大きな店を開きました。

ある日，わたしはポケットナイフがひつようになったので店に行ってナイフのおいてあるケースをさがしました。そして自分のすきなナイフをとってポケットにしまいました。わたしがナイフのケースのそばに立っていると，おとうさんがやってきて何をしているのかとたずねました。

わたしは，ナイフがひつようだったので店のケースからひとつとったことを話しました。するとおとうさんはそのナイフはおとうさんのものではないことを，やさしく説明してくれました。ナイフはその3分の2がいっしょに働いている人のものでした。ですから，おとうさんがそれをわたしにくれることも，わたしがかってにとることもできないのです。おとうさんはわたしにそのナイフをもとのところに返すように言いました。

わたしはこのとき，正直ということを学びました。時間をとって，わたしに正しいことと悪いことの区別を教えてくれたおとうさんに，心から感謝しています。おとうさんは他の人の権利というものを尊び，いつも正直な行ないをしていたので，おとうさんの生活そのものがわたしにとってすばらしいもはんでした。

正直ということをいつも心にとめておくと，あとになっていやな思いをするような悪いさそいにはのらなくなります。わたしたちは人のお金をとったり，学校でカンニングをしたり，うそをついたりしてはいけません。また自分の物でないものは決してとってはなりません。友だちに正直な人は，自分自身に対しても正直な人です。

おとうさんはまた，安息日も正直に聖くすごすようにと教えてくれました。子供ながらにもわたしはおとうさんがどんなに野球が好きだったかをおぼえています。でもおとうさんは決して安息日には野球をしませんでした。わたしも野球が好きでしたが，おとうさんが日曜日にはぜったいに野球をしないようにと言ったので，その言葉に従いました。

プロ野球の大リーグに出るチャンスがあったときにも，その約束を守りとおしました。おとうさんのもはんを考えると，そのようなチャンスをのがしても，おしいとは思わなかったのです。それほどわたしはおとうさんをそんけいしていました。

正しいことをよく理解して，わたしに毎日正直ということを教えてくれた両親に心から感謝しています。

サッカーボール

作　ジェリー・ジョンソン

絵　テッド・ヘニンガー

ジュリオは新しいサッカーボールを見ました。手の中で注意深くまわしたり，指先でボールのつぎ目をさわったりしました。

「気に入った？」マリアおばさんが聞きました。

「うん」ジュリオはそのボールがまだほんとうに自分のものだということが信じられないようすで答えました。「でもどうしてこれをぼくにくれるの？」

マリアおばさんは笑って言いました。「とてもよくお手伝いしてくれるからよ。おつかいに行ってくれたり，庭のそうじをしてくれたり。ほんとうはこのボールだけじゃたりないくらいなんだけど，おばさんにはこれくらいしかお礼できな

いの。喜んでもらえるかしら。」

ジュリオはおばさんの顔を見ました。おばさんがお金持ちではないことをジュリオはよく知っていたので，こんな高価なプレゼントを受けとってよいものかどうかまよっていました。でもおばさんの目を見るとそのボールを受けとらなかったらきっと悲しむということがわかりました。

「ありがとう。」ジュリオはやさしく言いました。

「このボールをなぜあなたにあげたのか，それをいつも覚えていてほしいわ。さあ，遊んでいらっしゃい。」マリアおばさんはジュリオに言いました。

ジュリオはもう一度おばさんにお礼を言うと，外へとびだ

して行きました。外は春の空気がいっぱいです。ジュリオは手の中で何度も何度もボールをまわしながら，マリアおばさんがどういう意味で「このボールをなぜあなたにあげたのかよく覚えていてほしい」と言ったのだろうと考えました。

少しして，ジュリオはつぼみのふくらんだ木に目をとめ，頭の中は別のことに移りました。ジュリオにとって春は友だちとサッカーに夢中になる季節でした。そして今年の春は，自分のサッカーボールがあるのです！

ジュリオはボールを地面に打ちつけて，玉石のしきつめてある道路を走りながらじょうずに足でけりました。

「おい，その新しいボール，どこで買ったんだい。」家から出て来たアントニオが聞きました。

「マリアおばさんにもらったんだ」とジュリオはとくいそうに答えました。

「それはすごいや！いっしょに遊んでもいいかい。」

「いいとも！」ジュリオが答えました。

アントニオとジュリオはボールを前や後ろにけりました。そのうちにほかの友だちも加わって，サッカーの試合ができるだけの人数が集まりました。

マリアおばさんは窓からそのようすを見ていました。ジュリオも遊びながら，時々目をおばさんの方に向けました。

ジュリオはサッカーが大好きでした。それにとてもじょうずでした。ジュリオは，いつか全ブラジルチームのメンバーとして活躍したいと思っていました。ジュリオはマリアおばさんもこのことを知っていると思いました。たぶん，それでボールをくれたのでしょう。

そんなことを考えていると目の前にボールがきました。ジュリオは足でうまくボールをあやつってゴールをねらいました。ゴールに近づくとジュリオはボールを思いきりけりました。ボールはすごいいきおいでゴールに入りました。

「うまいぞ！」アントニオが叫びました。

「ぼくらがリードだ！」

歩道でひとりの男の子がはずかしそうにじっとその試合を見ていました。みんなよりも年下のようでした。それからみんなの遊んでいるところにゆっくり歩いてきました。

「あ，ポーロがやって来る。仲間に入れたらだめだぞ。あいつはいつも試合をめちゃめちゃにしてしまうんだ。あいつを入れたらぼくたち負けちゃうよ」とアントニオがジュリオに小さい声で言いました。

たしかに，ポーロはあまりじょうずではありませんでした。ときどきボールを相手チームにとられたり，ひどいときは反対のゴールにボールをけってしまうようなこともありました。でもジュリオには，ポーロがどんなにサッカーが好きかわかっていました。

「入れてくれない？」とポーロは心をはずませて聞きました。

ジュリオはほかの男の子たちの方を見てから「だめだよ」と言おうとしました。そのとき，マリアおばさんの立っている窓に目をやりました。おばさんもどんな返事をするのかを待っているようでした。

「なぜあなたにあげたのか覚えていてほしい。」おばさんの言葉がジュリオの心に浮かびました。もう一度ジュリオはおばさんの顔を見ました。「おばさんに親切にしてくれたように，ほかの子にも親切にしてあげましょうね。」ジュリオにはおばさんがそう言っているように思えました。

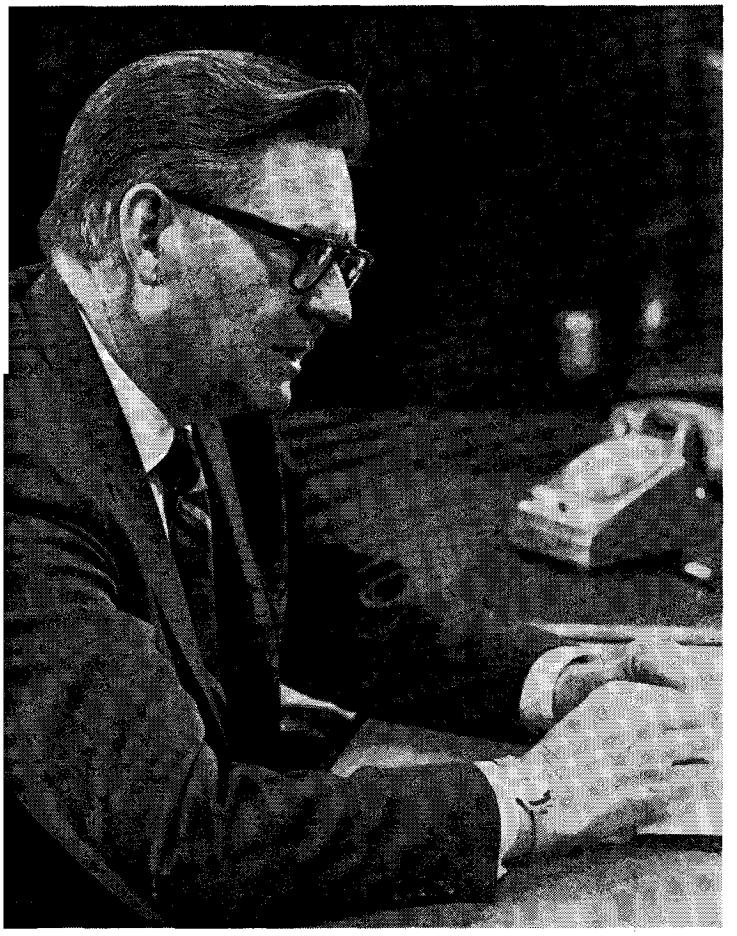
ジュリオは窓から目を離すとポーロの方を向いて言いました。「いいよ」そして他のだれかが口を出す前に，こうつけ加えました。「ほんとうのことというと，アントニオはとてもじょうずだから，きみにサッカーの試合について教えようと思っていたところなんだ。」

ポーロの顔はえがおにかわりました。「ほんと？」ポーロはうれしそうに言いました。

アントニオはジュリオの顔を見て，にっこりして言いました。「そうとも！きみが早くじょうずになれるように，みんなで教えてあげるよ。」

みんながふたたび試合を始めると，ジュリオは窓を見あげました。マリアおばさんはうなずきながらほほえんでいました。ジュリオはおばさんに手をふると，また試合を続けました。

ジュリオはマリアおばさんがなぜ新しいサッカーボールをくれたのかがわかりました。



ビクター·L·ブラウン監督との

一問一答

世界中を旅行して，教会の若人についてどのような印象を受けましたか。

教会の若人と会うときには，いつも献身と熱心な活動ぶりに心を打たれました。ブラジルで青少年アロン神権者の伝道部聖句コンテストに出席しました。アロン神権を持つ若者たちが聖句捜しや解釈をするのです。声を立てたり騒いだりはしませんでしたが，バスケットボールの試合のときのような緊張感がみなぎっていました。

また私はいろいろな国の聖餐会に出席しましたが，ひとつ思い出すのはサモアの聖餐会です。大体75人位の出席者でした。暑くて湿度も高かったのですが，執事や祭司は皆きちんとした服装でした。隣りに座ったステーキ部長が，このようにして，主に対して，あるいは神聖な儀式に対して敬虔さを示すのだと教えてくれました。外見の様子は彼らの心の様子をはっきりと示すものでした。

まとめて言うと，みたまが証するとき，文化も言語も皮膚の色も関係ないということです。文化が異なっているために若者の直面する問題が幾らか違ってはいても，福音が心に宿ると，そのパン種の力はぐんぐんふくらんで強くなり，福音によると兄弟愛のもとに皆ひとつになることを感じさせてくれます。実際福音に国境はなく，やがて最後には神の権能のもとに兄弟としてすべての民がひとつになります。現在の若者は，この兄弟愛の祝福をやがて経験する人たちです。

どの国の若人も直面しているひとつの問題は，服装と身だしなみの標準，純潔，幻覚剤等の社会的な圧力です。それに対して助言をいただきたいのですが。

社会的な圧力というものは実際にあり，私たちもそれをよく承知しています。と同時に，私たちはこれまで好ましくない社会的圧力というものばかり強調していたのではないかと思っています。しかし，それ以上に力のある好ましい社会的圧力もあります。もし清い生活をする友だちと交わっていたら，その人は不道徳な行動を取ることがなかなかできないでしょう。教会や福音の道徳基準はどこにいても同じです。私たちが本当にキリストに従いたいと思うなら，正直，高潔，純潔などの徳をみんなが守らなくてはなりません。例えば世の中を見ればおわかりのように，性道徳に対する文化的，社会的姿勢に多くの違いがあります。しかし福音は私たちにひとつの標準を与えています。合理化や妥協の余地は全くありません。教会の若人が，なぜ主は服装や行動や言葉の慎しみについて教えておられるのかを理解するようになれば，社会的圧力はそう大きな力を持たないと思います。主は，「姦淫してはならない」と言われましたが，これには同棲や同性愛も含まれます。教会の若人は，慎しみのなさがよく姦淫や私通を招くことを理解できるでしょう。また肌を異性の目にさらすことの危険性がわかるでしょう。若人が福音の根本原則を本当に理解したならば，ミニスカートやぴったりしたズボンなどのようなものに心を惑わされないはずです。問題はスカートの丈ではなく，慎しみや徳や自尊についてのその人の理解度です。

予言者ジョセフ・スミスが，「あなたは自分の民をどのよ

うにして治めますか」と聞かれたときの言葉に重要な教えが含まれていると思います。彼の返事はこうでした。「私は人々に正しい原則を教え，人々に自らを治めさせます。」原則は短いスカートではありません。原則は清く汚れない生活により救い主を代表することです。慎しみのない服装や行動はこの原則を壊すものです。私にとって一番大切なことは，教会の若人がこの基本原則を理解することです。若人たちが原則を守るならば，私たちはほかに何も心配する必要はありません。

幻覚剤を使うことは大きな悪事です。それはサタンの強力な武器です。幻覚剤は自由意志を失わせて悔改めを困難にします。当然のことながら，幻覚剤を何としても避け，幻覚剤を使用している人々とは交わらないことを勧めます。すでに幻覚剤のとりこになっている若者は，すぐに両親か監督のところへ行って，悪癖を断ち切る助けを求めなくてはなりません。

教会では教育を受けなさいとよく言われますが，高度の教育を受ける機会の少ない地域があります。またせっかく受けた教育を生かす機会がほとんどないこともあります。これについてはどうお考えですか。

だれでも大学教育を受けなくてはいけないというのは，間違った考えだと思います。それが目標に適しているならば良いことです。しかし同じ位に価値があって，決して軽んじてはならない目標がほかにもあります。職業につきながら教育と訓練を受けることです。もしその人が良い鉛管工であるなら，鉛管工であることは名誉なことであり，良い医師であるなら，医師であることは名誉なことです。平均で満足せずにさらに秀でようと良い業に励むというのが，福音の教える原則です。

教会の活動は教会員にすばらしい訓練の機会を与え，人生の各分野で成功を収めるための基礎を作ります。芸術活動（ドラマ，スピーチ，音楽，その他）に活発に参加する若者，そのような背景を持つ若者は，機会を持たない仲間よりも抜きん出るのが普通です。教育や訓練に信仰と勤勉が加われば，どのような職業を選んでも本当の成功を収めることができます。そのような人は，政治的あるいは社会的状況がどのようであれ，自然に身を興し，豊かな実りある人生への道を見いだすことでしょう。

人々はよく成功を富や名声や職業の成功と同じに考えます。あなたは成功というものをどのように考えておられますか。

成功の程度として，経済的成功は一番ささいなものです。成功者とは結局のところ，天父の御前に戻る準備のできた人のことです。この世の名声や富は，天父のみもとに帰れるかどうかの度合にはなりません。本当の成功者は主を愛して戒めを守る人です。必ずしもこの世の境遇に恵まれていないかもしれませんが，その人は人の理解を越えた平安，すなわちこの世が与えることのできない平安を享受することができます。

もうひとつの成功の目安は，結婚して自分の家族を持っている人に関係します。彼らの成功は，子供たちの管理の具合ではかられます。成功者といわれる父または母は，天父を愛し，戒めを守る子供を育てようと努力します。これ以上に偉大な成功はありません。そしてこの成功は，この世の物をどれだけ持っているかということとは全く無関係なのです。しかし同時に，主はその人に家族をよく養うことを期待しておられます。それは高価な家を持てとか富を得よとかいうのではなく，家族の物心両面の必要を満たしてあげるという意味です。またそれには，子供たちが自分の分を尽くして幸福な家庭生活に貢献する意味も含まれます。

この世の全生涯を独身で通す人もいるでしょう。そのような人も戒めを守り，現代の人々が必要としていることをいろいろな形で援助し奉仕しながら福音に従うならば，同じように成功者となることができます。

管理監督としてのあなたの責任のひとつに，教会員の福祉があります。大勢の病人や飢える人たちを抱えた地域で，教会は何をしていますか。

私たちはこのような問題を充分認識しています。そして地方の神権指導者を通じて，問題解決の援助をしています。私たちは主から啓示された方法に従い，いったん進歩があればそれから退歩がないように，基礎を固めようとしています。教会に医療宣教師がおり，現在は農業宣教師もいます。近い将来には社会奉仕宣教師を派遣することも検討しています。

医療宣教師には，専門教育を受け，健康管理の訓練を終えた看護婦や医師，その他が召されます。これらの特殊な宣教師が，現在多くの国々でそれぞれに適したより良い健康管理の方法を教えています。彼らの努力により，次の世代はさらに健康で充実した生活ができることでしょう。医療宣教師はある国々で，高い幼児死亡率を減少させるための育児指導も行なっています。その土地の食物を使った，バランスのとれた食事の仕方を教えるなど，正しい栄養摂取についても教えています。

農業宣教師も医療宣教師と同じような方法で働きます。彼

らは農業の正しい原則を教え，実地訓練を行ないます。合衆国で見られるようなトラクターが大がかりな近代農業機械は持っていきません。人々に現在行なっていることの改善策を教え，とうもろこしだけでなく，それ以外の穀物の栽培法や新しい野菜，果物の栽培法，土壌に適した耕作法，前年の穀物の残りを使って土地を肥やす方法などを教えます。

私たちは根本原則にのっとって，人々に自らの生活を支える方法を教える仕事を始めています。

全世界の教会の若人のために，一般的な助言や忠告をお聞きしたいと思います。

まず最初に言いたいことは，ハロルド・B・リー大管長が大管長就任の際に言われた勧告です。大管長は何かメッセージをと頼まれて，自分が与えることのできる最良の助言は，戒めを守るようにと言うことであると言われました。

私はさらに申したいと思います。現在家庭学習セミナリープログラムに全世界の若人が参加できるようになっています。教会のワード部や支部から遠く離れていても大丈夫です。このプログラムによってだれでも福音の勉強ができます。教会の若人が福音を勉強して救い主の生涯やその教えを知り，戒めを守れば，ほかのすべてのものが与えられるでしょう。なぜなら主は，「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば，これらのものは，すべて添えて与えられるであろう」とおらしゃったからです。（マタイ６：33）

世が悪への道をたどるにつれ，末日聖徒はますます特異な目立った存在になっています。私はいつも祈っていることがひとつあります。それは，教会の若者たちがおおらかに福音に従い，生活を通してまことの末日聖徒とは何であるかを世に示すことです。

主なる救い主イエス・キリストの再降臨に備え，義しい指導者となるために学び備える教会の若人に，私たちは心から愛と信頼を寄せています。

教会の管理監督

主が啓示によりこの神権時代に最初の管理監督を召された1831年以来，以下の10名がこの職にあって動いた。

1．エドワード・パートリッジ——1831年２月４日，38歳で啓示により召された。1840年５月27日ノーヴーで死去。

2．ニューエル・キンボール・ホイットニー——啓示によりカートランドの第一監督に召された。1844年10月７日，49歳で教会の第一監督として支持され，1847年４月６日に管理監督と称された。1850年９月23日，ソルトレークシチーで死去。

3．エドワード・ハンター——1851年４月７日，58歳で支持され，1883年10月16日ソルトレークシチーで死去。

4．ウイリアム・ボーカー・ブレストン——1884年４月６日，53歳で支持され，1907年12月４日病気のため解任。

5．チャールズ・ウィルソン・ニブレー——1907年12月４日，48歳で支持され，1925年５月28日ヒーバー・J・グラント大管長の第二副管長に支持される。

6．シルベスター・ケイル・キャノン——1925年10月６日，48歳で支持され，1938年４月６日十二使徒評議員会准会員に支持される。

7．リグランド・リチャーズ——1938年４月６日，52歳で支持され，1952年４月10日使徒に聖任。

8．ジョセフ・L・ワースリン——1938年４月６日第二副監督に，1946年12月12日第一副監督に，1952年４月６日，58歳で管理監督に支持され，1961年９月30日病気のため解任。

9．ジョン・H・バンデンバーグ——1961年９月30日，56歳で支持され1972年４月６日，十二使徒評議員会補助に支持される。

10．ビクター・L・ブラウン——1961年９月30日，第二副監督に支持され，1972年４月６日，57歳で管理監督に支持される。

見守る者よ悪人を戒めなさい

――現今の悪に対して言明する義務――

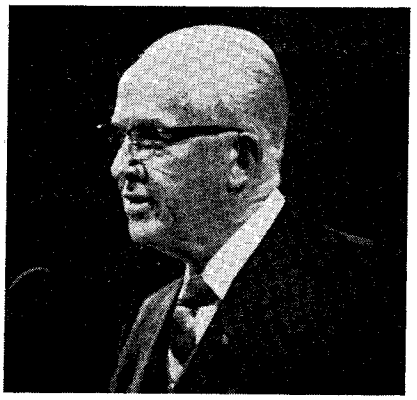
予言者エゼキエルは言った。

「人の子よ，わたしはあなたをイスラエルの家のために見守る者とした。あなたはわたしの口から言葉を聞くたびに，わたしに代って彼らを戒めなさい。わたしが悪人に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき，あなたは彼の命を救うために彼を戒めず，また悪人を戒めて，その悪い道から離れるように語らないなら，その悪人は自分の悪のために死ぬ。しかしその血をわたしはあなたの手から求める。しかし，もしあなたが悪人を戒めても，彼がその悪をも，またその悪い道をも離れないなら，彼はその悪のために死ぬ。しかしあなたは自分の命を救う。」（エゼキエル３：17―19）

モルモン経の霊感を受けた予言者たちは，現代を先見し，敵の策略について警告した。

「ごらん，その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行いをさせ，またこの人たちに善い事を怒らせる。またほかの人々をなだめ，この人たちをすかして肉欲をほしいままにさせる……。……実に人の誡命に聞き従い，神の権能と聖霊の賜とをしりぞける者は禍である。」（Ⅱ ニーファイ28：20，21，26）

主は近代の予言者ジョセフ・スミスを通じて，さらに警告された。「この故に，主の声は耳ありて聞かんとするすべての人々に聞かれんため地の果に



十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン

まで及ぶ。……主の声もまた主の僕らの声も聞かんとせず，予言者にして使徒なる者たちの言にも耳傾けんとせざる者のその民の中より絶たるべき日来るなり。そは彼らわが儀式より離れ去り，わが永遠の誓約を破りたればなり。彼らは主の義を打建てんために主を求めずして，あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求むれども，その姿は人の世の像にして……主，われ言いたることは，われ言いたるなり。われ言い逃れせず，天地は過ぎ行くとも，わが言は過ぎ行くことなくして成就すべし。わが声にて言わるるも，僕らの声にて言わるるもみな一つなり。」（教義と聖約１：11，14―16，38）

この警告は140年前に与えられた。そして今，成就されつつある。自己満足や悪人の狡猾さによって目をくらまされていなければ，私たちはこの目でそれを見ることができる。

シオンの塔の見張り人である私たちが，キリストのまことの教会員，キリスト教国家の国民として信じている事柄の根本を揺り動かす現今の諸悪に対し，指導者の立場からはっきりと反対を述べることは，義務であり権利である。

その見守る者のひとりとして，私は人類愛をもって謙遜にその義務とチャレンジを受け入れ，恐れずに喜んで務めを果たそうと思う。容易ならぬ現代にあって，私たちのこの勧告が当局に監視される懸念があったり，政府がますます生活に介入して来るときでさえ私たちは批判を恐れるあまり義務を怠るようであってはならない。

私たちが今経験している危機については，これまでよく警告されてきた。それはとかくの批判を生んだ。言葉を聞きたくない人も私たちの中にいる。それが問題である。私たちの生活や福祉や自由を脅かすものを，私たちのある者は許容してきた。多くの人は気持よい自己満足にひたっているとき，それを乱されることを望まない。

教会は永遠の真理の上に立っている。私たちは原則において妥協せず，現代の風潮や圧力にも屈せずに標準を守り抜く。教会の真理に対する忠誠は不動である。遠い昔から，不道徳や不

正を非難することは神の予言者，神の弟子たちの責任であった。彼らの多くが迫害されたのも，実にこのゆえであった。それでもなお，民に警告を発することは，塔の見張り人である彼らに神より与えられた務めであった。

この時代は妥協の時代，原則がその犠牲となる時代である。しかし妥協は解答を与えない。それは決して正しい答えではない。

近代の教会を見守る者のひとりが，次のような正しい警告を与えている。

「情熱を傾けた献身は，大義やその支持者たちに魂と生命を与えるが，気の抜けた忠誠心はそれらを骨抜きにしてしまう。世のわずらいは多分に，熱くも冷たくもない者たち，常に風当たりの一番少ない側につこうとする者，小心で真理の側につくのに四苦八苦する者の戸口に横たわるものである。天上の大会議同様，地上のキリストの教会に中立は存在しない。主の側につくかつかないかのどちらかである。堅い信仰と一切の妥協を許さない感度が教会と教会員を勝利へと導き，主が示された高い理想を実現させるのである。

地上の最後の征服者は，数の多少を問わず，恐れずためらわず真理につく男女，『はい』と同時に『いいえ』を言える男女である。彼らが高く揚げる旗にはこう記されている。『誤った妥協をしてはならない。……』

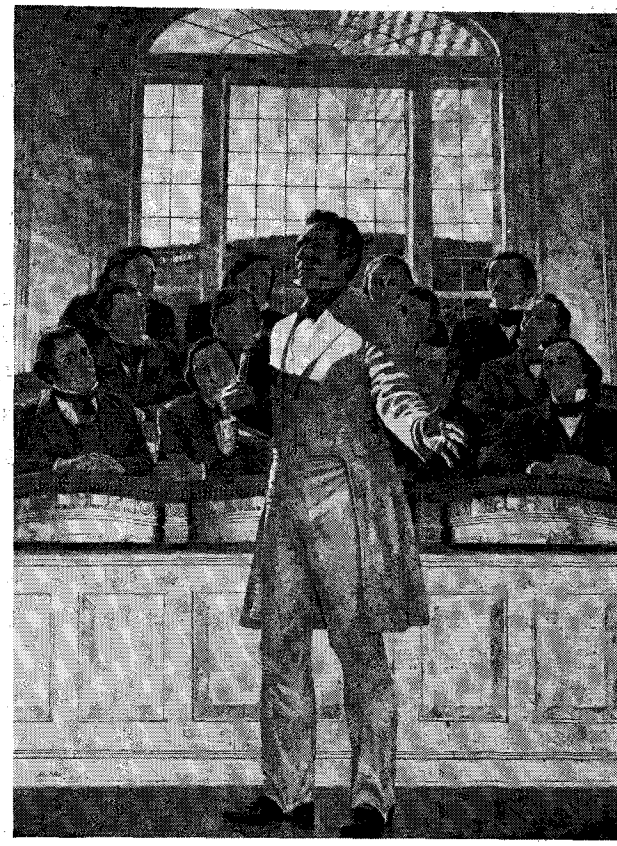
寛容は，世の見解や習慣に服従することではない。私たちはいかに愛する人，影響を受ける人とはいえ，**人々とうまく折り合うために自分の信念を曲げてはならない**。社会的な地位を得たり，同調するためであっても，その払う代価は高すぎるであろう。……福音は永遠の真理に支えられている。真理が去って，決して安全は残らないのである。」（ジョン・A・ウイッツォー「大会報告」1941年4月〔英文〕P. 116，117）

「国家最大の問題は侵食である。土壌の侵食ではない。国の道徳の侵食である」とよく言われている。

アメリカ合衆国は自由であったがために偉大であった。神に信頼をおき，神の御言葉に述べられた自由の原則に基礎を置いたために，国は自由であった。この国は霊感を基に建てられた。私には，この国が予言的な歴史を持つように思える。

1831年，フランスの有名な歴史家アレクシー・ダ・トクビルはフランス政府の要請でアメリカ合衆国の刑罰制度を視察に訪れた。彼は合衆国の政治形態と社会制度を綿密に調べ上げた。そして10年足らずのうちに「アメリカの民主主義」という4巻にわたる書物を著わし，世界的な名声を得た。アメリカの偉大さを彼はこう述べている。

「私はアメリカの偉大さ，その特性を広い港や豊かな河に捜し求めたが，そこにはなかった。肥沃な畑や限りない草原に捜し求めたが，そこにもなか



主はジョセフ・スミスを通じて警告された。
「主の声に耳を傾けんとせざる者の
その民の中より絶たるべき日来るなり。」

った。富める鉱山や大規模な外国貿易に捜し求めたが，そこにはなかった。アメリカの教会へ行き，正義に燃える聖職者の説教を聞くときまで，私はアメリカの特性と力の秘密を見いだせなかった。アメリカは善良であるがために偉大である。もしアメリカが善を放棄したならば，アメリカの偉大さは止むであろう。」（ジェレド・L・ニューキスト編，「予言者，原則，国家の命運」〔英文〕P.60）

自由を守り，善良であろうとする私たちの意志は，どれほど強固であろうか。最も心地良い外見に包まれた誤った思想，誤ったイデオロギーは，静かに，ほとんど意識されずに，私たちの道徳の防壁をつきくずし，私たちの心を捕えようとする。それは明るい将来の保証やゆりかごから墓場までのいたれり尽くせりの保証で私たちを誘う。いろいろな名目にかこつけるが，すべてはひとつの共通のものに，要約される。それは人格と，自分で考えて行動しようとする人の自由をむしばみ，侵食することである。

私たちをだまして安心させようと，いろいろな努力が払われるであろう。広く訴える力を持つ提案が現在にも将来にも出され，多くの人の心を動かす活動が提唱されるであろう。最も危険な活動に魅力的なレッテルを張るのが常とされ，それが公共の福祉や個人の安寧という名義であることもしばしばである。再び言う。迷わされないようにしよう。

自由は，直接的な攻撃と同様に怠慢によっても抹殺されることがある。

あまりに長い間，あまりに多くのアメリカ人あるいは自由世界の国民は，自由に対する攻撃，国家を強固ならしめていた根本的な経済的，霊的な伝統や習慣を攻撃する犯罪に対して，物言わぬ共犯者として傍観してきた。

善と自由の道を前進すべく励もうではないか。自由世界の国民は主の助けと恵みを得て，恐れなく，疑いなく，十分な自信を持ち，明日に立ち向かうことができる。

ある合衆国大統領は何年か前に，次のような言葉でその問題を指摘した。

「私たちにはこれ以上の物質的進歩は必要なく，霊的な進歩が必要である。これ以上の知力は必要なく，道徳的な力が必要である。これ以上の知識は必要なく，人格が必要である。これ以上の統治は必要なく，さらに必要なのは文化である。これ以上の法は必要なく私たちに必要なのは信仰である。目に見えるものはこれ以上必要ない。私たちに必要なのは見えないものである。現在強調されるべきものは，生活のこの側面である。もしこの側面が強化されるなら，他の面は自然に強くなるであろう。他のすべての基礎となるのがこの側面である。基礎が堅ければ建物は立つであろう。」（「予言者，原則，国家の命運」〔英文〕P.35）

自由の国民である私たちは，多くの点で大ローマ帝国を崩壊へ導いた道によく似た道を歩んでいる。ローマ滅亡を来たらしめた状態を，有名な歴史家たちがこのような言葉で端的に語っている。

「……ローマは，私たちの開拓期とそう違わない歴史を辿って興こされた。そして偉大な2世紀に入り，その後半に頂点を迎え，3世紀目に衰退し崩壊した。しかし衰微の罪は2世紀目後半に顕著になりつつあった。

怠惰な富者，怠惰な貧者の数が急増したと記録されている。後者（怠惰な貧者）は私たちの国の福祉対策とさほど違わない終身失業手当てを与えられた。この手当てが終身制になると，受給者や福祉事業が増えた。そして受給者はかなりの力を持つ政治勢力となった。彼らは憶せずに要求した。政府もためらわずに……ひんぱんになる一方の要求に応えた。ひとりよがりの皇帝が彼らに迎合した。今日のアメリカと同様にローマの力となっていた多数の堅実な中産階級に，強大になり続ける官僚政府を支えるための税が次々と課せられた，緊急事態に処するため，収入に付加税がかけられた。また政府の財政は赤字であった。50セント硬貨に似たデナリ銀貨が，銀の色つやを失くし始めた。政府が銀貨の銀を減らしたため銅の赤褐色を帯びたのである。

当時でさえ，グレシャムの法則通りに，真正の銀貨はすぐに姿を消し，隠匿された。

ローマ人にとって，兵役は非常に名誉ある義務であった。事実，ローマ軍団に志願するだけで外国人はローマ市民権を得ることができた。しかし富が増すと共に，ローマの若者は，腐敗する柔弱な都市生活に留まる口実を見つけては兵役を拒否し始めた。若者たちは化粧品を使い始め，女性のような髪や衣装をつけ，ついには男女の区別もつけにくくなったと歴史に記されている。

教師や学者の中からキニク学派と呼ばれるグループが生まれ，頭髪とひげを伸ばし，薄汚ない服を着，「中産階級の価値観」と呼ぶものを軽蔑して，俗世のものへの無関心を公言した。

道徳は退廃した。郊外や町の通りを安心して歩けなくなった。暴動は日常茶飯事で，町や都市が焼かれることもしばしばあった。

また終始，税の没収と忍び寄るイン

フレという二重の災難が，死者に一撃を加えようと待ちかまえていた。

そしてついに，それらすべての力が中産階級の精力と野望とを圧倒した。

ローマは滅亡した。

私たちは，今やアメリカの２世紀目の終りに近づいているのである。」(1969年，ニューヨーク，アイゼンハワー大学，ロナルド・リーガンの講演より)

1787年エドワード・ギボンは有名な「ローマ帝国の衰退と滅亡」という本を書いた。彼が書いた滅亡の過程は次の通りである。

１．人間社会の基礎である家族の尊厳と神聖さが危機にさらされた。

２．税金や，民衆にただで食べ物や見せものを提供するための公費の出費が増加の一途をたどった。

３．娯楽熱，スポーツ熱が年を追うごとに異常に高まり，残酷になった。

４．真の敵は国民の堕落の中にあるのに，巨大な軍備を整えた。

５．宗教の衰微――信仰は単なる形になり果て，生活とかけ離れ，警告や指導の気力を失った。

現代の私たちと類似してはいないだろうか。ローマが滅びたと，同じ原因で，自由世界諸国が滅びはしないだろうか。

この８年間，私の机には祈りを込めたこの言葉が置いてある。

「おお神よ，投票によるよりも高貴な指令を受けた人々を，我らに与えたまえ」

偉大な業績を持つ今，多くの重大な示唆を含む歴史の教訓に目を向けなくてはならない。成功は最大の危険をはらんでいるからである。繁栄の間にも国は崩壊の種をまくことがある。歴史によっても明らかなように，国の内部が脆弱でないのに外部から征服された大文明はごくまれである。

歴史の教訓は道標であり，私たちの将来を安全に導いてくれるのである。

私たちは自由世界の国民として，当面する問題に立ち上がらなくてはならない。これらの道徳，霊的面において基礎となる根本原則が，私たちの過去の業績の土台となっていたことを認識しなくてはならない。今享受している祝福を将来も享受するために，私たちはその根本的な基本原則に戻らなくてはならない。経済も道徳も分離不可能な真理の本体の一部である。ふたつは調和しなくてはならない。私たちはこれら永遠の真理に自分の行動を一致させる必要がある。

末日聖徒イエス・キリスト教会は，自由世界の根本をなす伝統である大切な霊的，道徳的原則を堅く支持するものである。私たちは，時のはじめから文明の底力となってきたこの永遠の真理を下落させたり，脅かしたりする悪の試みに対抗する。

私たちはあらゆる正しい手段を講じて家庭と家族を強固にしようとする。気高い両親を通して与えられた生めよふえよ，地に満ちよとの最初の大いなる戒めに従うよう勧め，高度の霊的，道徳的原則を固く守ることにより人格を高めようとする。

末日聖徒イエス・キリスト教会にあっては，純潔はいつまでも決して時代遅れとならない。男性にも女性にも同じひとつの標準がある。その標準とは道徳的な清さである。私たちは，最も基本の単位，すなわち家庭と家族という基礎を攻撃する忌むべき堕胎やその他神を冒瀆する汚れた行為をすべて憎み，反対する。

それらの不道徳な行ないを続ければ必ずや全能者の怒りと裁きが下るであろう。

私たちは物の獲得と物質主義に心を集中して，この繁栄と安全と自由の土台である霊的な基盤を忘れてはいないだろうか。私たちが良くない行ないを悔い改め，犯した罪の大きさを知り，低くへりくだるよう，神は助けて下さる。

大きな安全はひざをかがめる国に存在する。

各地の民が朝な夕なにひざまずき，神に頼って神の導きを求め，受けた恵みを感謝したならば，必要とする主の祝福は確かに得られるのである。

祈りがある国家のさまは原子爆弾よりも大きな脅威を与え，さらに強力である。人力をいかに結集しても，祈りの力にはとうていかなわない。なぜなら，「祈りは神の力を頼む人間最大の手段」だからである。建国の父祖はこの永遠の真理を受け入れたが，今の私たちはどうであろうか。将来の私たちはどうであろうか。

この簡単な習慣，祈りという強力な習慣は実際私たち自身の益となる。何年も前にある人が言った。「何にもまさってこの国に必要なものは，昔ながらの家族の祈りである。」

その通り，私たちに最も必要なのは年月に耐え抜いた昔ながらの真理に復帰することである。

神は，私たちが自由な人間として受けている祝福の源を悟り，自由と，道徳的，霊的標準を脅かすものを見きわめ，謙遜にしかし勇気ある行動をもって，時の試練に耐え抜いた価値ある恵みを守り抜く必要を悟るように，助けて下さる。イエス・キリストの御名により，へり下って祈るものである。アーメン。

信仰，希望，愛があった

――教会福祉事業のすべて――

管理監督会第二副監督

ボーン・J・フェザーストーン

ロムニー副管長は最近，「福祉は教会プログラムではない。教会の本質である」と言われた。私も心からそのように思う。福祉は，教会員の物的必要を満たす以上のものである。福祉は個々の教会員のためにある。96パーセントの人が日用品の援助が必要なく，監督の倉庫から物を受け取らなくてよい状態である。しかし，福祉は与える側の人や物品の支給を受けなくてよい人のためにもあるのである。

聖典にはロムニー長老の言葉を裏づける聖句が数多く載っている。モーサヤ書でベンジャミン王は語っている。

「またお前たちは，……物もらいがお前たちに乞いねがうのを拒んだり……しないであろう。おそらくお前たちは『この者は自分自身でこのみじめな有様を招いたのであるから，私はかれを助けるのを止め，その苦しみを救うために私の食物を与えず，また私の持物も分けてやらない。その苦しみは当然の罰であるからである』と言うであろうが……このようなことをする者は誰でも大いに悔い改める必要がある。もしもその行いを悔い改めないならば，お前たちはとこしえに亡びて神の王国の民となることはできない。ごらん，私たちはみな物もらいではないか。…」（モーサヤ４：16―19）

またパウロははっきりこのように言った。「たといわたしが，人々の言葉や御使たちの言葉を語っても，もし愛がなければ，わたしは，やかましい鐘や騒がしい鐃鉢と同じである。」（Ⅰコリント13：１）

そして当然ながら，大いなる天地の救い主も，すばらしいひとつのたとえ話によってこの非常に深遠な教えを授けられた。主はこのように言われた。

「ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て，毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが，ラザロという貧乏人が全身でき物でおおわれて，この金持の玄関の前にすわり，その食卓から落ちるもので飢えをしのごうと望んでいた。その上，犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧乏人がついに死に，御使たちに連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみながら，目をあげると，アブラハムとそのふところにいるラザロとが，はるかに見えた。そこで声をあげて言った，『父，アブラハムよ，わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって，その指先を水でぬらし，わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。アブラハムが言った，『子よ，思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け，ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは，彼は慰められ，あなたは苦しみもだえている。それればかりか，わたしたちとあなたがたとの間には大きな淵がおいてあって，こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし，そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできない』。そこで金持が言った，『父よ，ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので，こんな苦しい所へ来ることがないように，彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った，『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った，『いえいえ，父アブラハムよ，もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら，彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った，『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら，死人の中からよみがえってくる者があっても，彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう。』」（ルカ16：19―31）

私は，救い主はここで大切なことを教えておられると思う。貧しい人々があれば，主は大いなる恵みの方法によって物を与えられるであろう。キリストの純粋な愛とは福祉であると思うからである。それには，私たちの行ないの次元を越えた高度のものが求められると思う。福祉は最も純粋な形の愛ではないだろうか。

それは単なる物的福祉にとどまらない。社会的，情緒的な必要を教会によって満たすことである。不具の人々の健康を世話し，守ることである。私たちにはこの分野における大切で神聖な責任が課せられていると思う。リー大管長は，私の読んだ限りにおいてどの言葉よりも美しくこのことを語っている。1946年の10月大会で彼はこう述べた。

「私は心を……愛……で満たす人にある力が生じることを知っている。何年か前のある晩のこと，私はベッドに入っていて高い地位の召しにふさわしくなるにはあらゆる人を愛し，赦さなくてはならないと悟り，そのときに平安と導きと，慰め，霊感を感じ取り，来たるべきことを教えられ，私の知ったことが神よりのものであると心に強く感じた。」（「大会報告」1946年10月〔英文〕P.146）

これは，予言者が地のすべての人を愛し，赦し，心にかける責任を感じたということではなかろうか。

私の親友のひとりに，偉大な賜に恵まれた作家のレス・ゴーテス兄弟がいる。私は彼の許しを得て，福祉がまずどんな形で彼の家庭にもたらされたかを，彼の言葉の一部を借りて紹介したい。

「私の家族にとって，福祉プログラムは1918年の秋，サラトガロードのリーハイの西にあるオールドフィールドで始まりました。その年は第一次世界大戦中で，『黒死病』とも言われたスペインインフルエンザの恐ろしい災禍を被って1,400万以上の人々が死んだ，最高に悲惨な年でした。

その年は冬が早く来て，大量のてんさいが収穫を待たずにそのまま凍りました。父と弟のフランシスは必死になって凍った地面から一日一荷のてんさいを堀り出そうと，土をすき，表面をけずり，てんさいを1本1本，大きな赤いてんさい運搬車の中にほうり投げ荷を砂糖工場に運んで行きました。凍っていた上，人手がなく，作業は遅々として進みませんでした。兄のフロイドと私が軍隊に入っていたからです。しかし皆から『フランツ』と呼ばれたフランシスは年齢が若いため徴兵されていませんでした。

こうして父と弟が唯一の収入源のてんさいを収穫し，ある日夕食の席についていたときのことです。オグデンの州立工業学校の校長をしている長兄のジョージ・アルバートから電話がかかってきました。学校の農場管理を担当している兄のチャールズの，9歳になる息子のケネスが悪性のインフルエンザにかかり，数時間危篤に陥ったあと父親の膝で息をひきとったとのことでした。それで父にオグデンに来て遺体を家に連れて帰り，リーハイ墓地の代々の墓に入れてほしい，と言われました。

私の父はほこりのつもった旧式のシボレーのエンジンをかけ，亡くなった孫の遺体を迎えにオグデンのファイブポインツへ出かけました。家に着くと『チャール』は，耳や鼻から黒死病特有のきたない茶色のうみを出して熱で焼かれたような姿になった息子の冷めたい遺体に取りすがっていました。

福祉は
与える側の人や，
物品の支給を
受けなくてよい
人のためにも
あるのである。

悲しみに打ちひしがれた若い父親は『この子を連れて帰って，家族の墓地に埋めてやって下さい。そして明日またここへ戻ってきて下さい』とボソボソと言いました。

父はケネスを家へ連れて来て，納屋で棺を作り，母と姉のジェニーとエマとヘーゼルがクッションをあてがい，棺に入れて，父とフランツと近所の人ふたりで墓へ埋めに行きをした。死者が大勢出たので，どこの家でも墓穴堀りをしなくてはなりませんでした。墓のまわりで簡単な葬儀をすませるのが精一杯でした。

墓地から皆が帰らないうちにまた電話が鳴って，ジョージ・アルバート（バート）がまた悲しいニュースを知らせてきました。チャールが死んで，7歳のベスタと5歳のエレインが重体で，4歳のレルドンと3歳のポーリンも病気にかかったというのでした。

一家と懇意にしていた親切ないとこのラーキンがチャールの棺を手に入れ鉄道荷物便で家に送ってきました。父と小さいフランツが遺体を駅から運び近所の人との告別のために，それを私の家の玄関の前に置きました。しかし人々は黒死病を恐れて近づこうとしません。その間に父とフランツは近所の人といっしょに，墓の用意と，造り主のもとへ招かれた偉大で高貴な霊であるチャールズ・ハイラム・ゴーテスをたたえる短い葬儀の準備のために出かけました。

翌日，頑健で不屈な老父はまたも悲しいつとめに呼び出されました。今度は黒髪で大きな青い目の，いつもニコニコしていたベスタを家に連れて帰ることでした。

父がその家に行くと，悲しみに気も狂わんばかりの母親のジュリエットが金髪にカールのかかった青い目のかわいいエレインの寝台のわきに膝をついていました。ジュリエットは疲労困憊してすすり泣きながら祈っていました。『ああ天のお父さま，この子はどうか！　この子を取り上げないで下さい！　かわいい子供たちを，もう私から取り上げないで下さい！』

父がベスタを連れて戻る前に，また恐ろしい知らせが入っていました。エレインも父親や兄のケネス，姉のベスタのもとに旅立ったのです。こうして父はまたもや悲痛な旅をして，1週のうちにひとつの家族から4人もの死者を葬ったのでした

エレインを埋葬した晩に電話は鳴らず，その翌朝も悲しい知らせはありませんでした。ジョージ・アルバートと勇気ある妻のデラが，病気にかかりな

農場の入口に着き，
馬車を中に引き入れてからひと息ついて
あたりを見わたしました。
ジャスパー・ロルフの言った言葉の
意味わかったのはそのときでした。
『こりゃみんなジョージおじさんのものだぜ！』

がらも幼ないレルドンとポーリンを救ったのでしょう。看護婦をしているいとこのレバ・マンズが手伝いに来てくれたことも救いになったのだと思います。

朝食がすむと父はフランツに言いました。『なあ，フランツ，畑に出て，あまりカチカチにならないうちにてんさいを掘り出して，荷ごしらえしてしまおうじゃないか。馬を車につけて出発しょう。』

フランシスが4頭立ての馬車を御してきて，父が飛び乗りました。ふたりはサラトガ街道に沿って馬車を走らせました。途中で工場にてんさいの荷を運ぶ近所の農夫の馬車の列に出会いました。通り過ぎるときにだれもが挨拶を交しました。『やあ，ジョージおじさん』，『大変だったなあ，ジョージ』『相変わらずやってるな，ジョージ』『お前には友だちがいっぱいいるな，ジョージ』。

最後の馬車は，町のひょうきん者，いつもゆかいな赤毛でそばかすだらけのジャスパー・ロルフでした。彼は笑顔で挨拶を送り，叫びました。『こりゃみんな，ジョージおじさんのものだぜ！』

父はフランシスの方を向いて，『あれがわしらの物だったらなあ』と言いました。

農場の入口に着くと，フランシスが大きな赤いてんさい運搬車から飛びおりて門をあけました。そして馬車を中に引き入れてから，ひと息ついて，あたりを見わたしました。左から右，うしろ，前と。するとまったく驚いたことに，てんさいが見あたりませんでした。ジャスパー・ロルフの言った言葉の意味がわかったのはそのときでした。『こりゃみんなジョージおじさんのものだぜ！』

父も馬車からおりました。心から愛する豊かな茶色の土を手にすくい，親指のない左手にてんさいの葉を持った父は，この労働の象徴をわが目を疑うかのように見つめていました。

そして父はてんさいの葉の山に腰をかけました。わずか6日間で愛する者を4人埋葬のために運び，棺を作り，墓を掘り，衣装縫いまで手伝いながら決して動じなかった驚くほど強い父，苦しい目にあいながら動揺しなかった父が，てんさいの葉の山に座って子供のようにすすり泣きました。

それから立ち上がった父は，大型の赤い絞り染めのハンカチで目をぬぐい空を見上げて言いました。『父よ，ワード部の長老たちに感謝します』と。」

主が私たちに方法をはっきり示して下さるとしたら，これこそその望んでおられることではないだろうか。主は次のように願われたではないか。

「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから，わたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである。」（マタイ11：28—30）

だれが大きな祝福を受けただろうか。畑に行き，ゴーテス兄弟のてんさいを収穫した長老たちではなかろうか。彼らが大きな祝福を受けたことを知っていただきたいと思う。

最後にパウロのこの言葉を心に留めてほしい。

「このように，いつまでも存続するものは，信仰と希望と愛と，この三つである。このうちで最も大いなるものは，愛である。」（Ⅰコリント13：13）

イエス・キリストの純粋な愛が私たちひとりびとりと共にあるよう，また私たちが教会におけるすべての福祉活動をよく理解できるよう，救い主イエス・キリストの御名により祈る。アーメン。

灰色の羽のカナリヤ

――気高く生きること……人間本来のあるべき姿を知る必要がある――

十二使徒評議員会会員

トーマス・S・モンソン

23年ほど前，私は若くしてソルトレークシチーの大きなワード部の監督に召された。私は召しの重さに圧倒され責任に恐れを感じた。自分の力の無さが私をへりくだらせた。しかし天父は私を闇と沈黙の中に教えや導きのないままさまよわせなかった。主は主の方法で教訓を与え，私に教えられた。

ある晩遅く電話のベルが鳴った。「モンソン監督，こちらは病院です。あなたの教会のキャサリン・マックィーさんが今亡くなられました。こちらの記録には親族がおられないことになっていますが，死亡時の連絡者にあなたのお名前が載っています。すぐ病院に来ていただけますか。」

病院に着くと，一枚の封筒を渡された。開けてみると，キャサリン・マックィー姉妹の質素なアパートの鍵が入っていた。73歳の子供のいないやもめの彼女は，ぜいたく品をほとんど持たず，必需品がわずかばかりあるだけだった。彼女は人生のたそがれ時に末日聖徒イエス・キリスト教会に入ったのだった。静かで極端に内気なせいか，彼女の生活についてはほとんど知られていなかった。

その晩私は，アパートの地下にある彼女の部屋に入り，灯りをつけた。中はきちんと片付けられていた。すぐに目に入ったのは，キャサリン・マックィー姉妹自筆のこまかに書かれた手紙だった。小さなテーブルに表を上にして載せてある手紙の文面は，こうだった。

「モンソン監督，

私はきっと病院から帰らないと思います。たんすの引出しに少額ですが保険の証券が入っていますので，それを葬儀費用にして下さい。家具は近所の方々に差し上げて下さい。

台所には大事なカナリヤが3羽います。2羽はきれいな黄色で姿も見事です。それぞれのかごの上に差し上げる方の名前を書いておきました。3番目のかごのは「ビリー」です。私のお気に入りです。ビリーはせっかくの黄色も羽に灰色が混じって少々みすぼらしく見えます。あなたのお宅でビリーを飼って下さいませんか。きれいではないですが鳴き声は一番です。」

それからの数日というもの，私はキャサリン・マックィー姉妹について多くのことを知った。彼女は大勢困っている人を助け，通りの先の方に住んでいる身障者を毎日のように励まし，元気づけてあげていた。彼女は接する人たちの生活に光をともしていたのである。キャサリン・マックィー姉妹は，大事にしていた灰色の羽のカナリヤ，ビリーとよく似ていた。彼女は美しさを恵まれず，身のこなしは洗練されず子供もなかった。しかし彼女の歌う歌は人々に喜んで重荷をになう力を与えたのである。彼女はこの歌の歌詞そのままに生きたのだった。

「行け　寂しき者や悲しむもの救え
親切のわざで徹け　世を輝かせ
世をさらに輝かせ」
（讃美歌240番）

世には灰色の羽のカナリヤが多くいる。悲しむべきは，そのうちのごく少数しか，歌うことを知らないことである。おそらくは良い手本の確かな鳴き声が耳に響かないか心に留まらないのであろう。

若者の中には，自分が何者であり，どのようになれるか，あるいはどのようになりたいかさえ知らない人々がいる。彼らは恐れを抱くが，何を恐れているかを知らない。怒りはするが何を怒っているかを知らない。拒否されるが，その理由を知らない。彼らの望みといえば，地位，名声を持つ人間になることである。

またある人は年齢に気をくじかれ，世のわずらいに悩み，猜疑に心を奪われ，自分の能力より低い生活をする。

私たちはだれでも自分の劣った行ないを弁解しがちである。不運や姿の悪さやいわゆるハンディキャップのせいにする。自分を正当化の犠牲にして，心につぶやくのである。「私は弱いからだ」，「もっと良いことなど自分に

キャサリン・マックイー姉妹は，大事にしていた灰色のカナリヤ，ビリーとよく似ていた。彼女は美しさに恵まれなかった。しかし彼女の歌う歌は人々に喜んで重荷をになう力を与えたのである。

は無縁だ」と。またある人たちは自分の力量以上のことを夢見てねたみと落胆の声をあげる。

私たちは，人生の務めが他人より抜きんでることではなく自分自身に抜きんでることであるのを，理解できないだろうか。自分の記録を更新すること，きょうよりもあす向上すること，自分が考えていたよりももっと立派に試練を耐え抜くこと，今まで以上のものを人に与えること，今までよりももっと頑張って良い仕事をすること――これが自分に抜きんでることの本当の意味である。

立派に生きるために，私たちは困難に勇気をもって，落胆にほほえみをもって，勝利に謙遜をもってあたる能力を伸ばさなくてはならない。あなたは「どうしたらそのようにできるのか」と尋ねるだろう。その答えは「自分が本当は何者であるかを正しく認識することによって」である。「神のかたちにかたどって造られた。」この真理を考えてみなさい。私たちがこの確信を得たならば，強さと力を，神の戒めに従う強さとサタンの誘惑に抗する力を，新たに深く感じないではいられない。

実に私たちは，人格が顔の美しさや姿のきれいさの二の次にされがちな世の中に住んでいる。地方や国や国際間の美人コンテストが記事になり，ニュースになる。ミスアメリカ，ミスワールド，ミスユニバースに大勢の群衆が賛美の目を向ける。運動選手にも崇拝者がいる。冬季スポーツ，世界オリンピック，国際試合はうっとりする群衆の熱烈な賞賛を生む。これが人の常である。

ところで神よりの啓示の言葉はどうであろうか。いにしえの時代から予言者サムエルの忠告が聞こえてくる。「……わたしが見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見，主は心を見る。」（サムエル上16：７）

王の王，主の主には見せかけや偽善は通用しない。主は律法学者やパリサイ人の虚栄と浅薄な生き方，見せかけと偽善を非難された。主は彼らを「白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが，内側は死人の骨や，あらゆる不潔なものでいっぱいである」と言われた。（マタイ23：27）

彼らは美しい黄色のカナリヤのように，外側はきれいだが，彼らの心からは，美しい歌は聞こえてこない。

それと同様のことをアメリカ大陸で神の予言者が述べた。「ごらん，あなたたちは金銭と自分の財産と自分の華やかな衣と自分の教会の華やかな飾り物とを，貧しい人々，病気の人々および悩んでいる人々よりも愛するのである。……なぜキリストの御名を受けることを恥とするか。……なぜあなたたちは生命のない物を自分の身に飾りながら，飢えている者，貧しい者，はだかでいる者，病んでいる者，また悩んでいる者たちがあなたたちの前を通り過ぎて行くとき憐まないのか。」（モルモン８：37―39）

主は貧しい者，しいたげられた者，悩みある者，苦しむ者と交わっておられた。絶望した者に望みを，弱い者に強さを，捕らわれた者に自由をもたらされた。主は来たるべきより良い生活，永遠の生命についてさえ教えられた。その知識は，「わたしについてきなさい」という聖なる命令を受けた人々を常に導いたのだった。ペテロがその知識に導かれた。パウロが動かされた。この知識は私たちの将来を決定できるのである。私たちは正しく真実に世の贖い主に従おうという決心ができるだろうか。贖い主に助けられて，反抗的

な少年は従順な青年になり，迷う少女は古い自分を捨てて新たな一歩を踏み出すことができる。事実イエス・キリストの福音は人生を変えることができるのである。

使徒パウロはコリント人への手紙の中で教えた。「……神は……強い者をはずかしめるために，この世の弱い者を選び……」。（Ⅰコリント１：27）

救い主が信仰の人を捜されたとき，ユダヤ人の会堂によく見られる独善的な人を選びはしなかった。それよりもカペナウムの漁師の中から人を選ばれた。

主は岸辺で教えていて湖のわきに寄せてある２そうの舟に目を留められた。主はその１そうに乗り，持ち主に頼んで群衆に押されないように舟を水の上に出した。さらに教えを説き続けてから，主はシモンに「沖へこぎ出し，網をおろして漁をしてみなさい」と言われた。

シモンは答えた。「『先生，わたしたちは夜通し働きましたが，何も取れませんでした。しかし，お言葉ですから，網をおろしてみましょう。』そしてそのとおりにしたところ，おびただしい魚の群れがはいって，網が破れそうになった。……これを見てシモン・ペテロは，イエスのひざもとにひれ伏して言った，『主よ，わたしから離れてください。わたしは罪深い者です。』」（ルカ５：４－６，８）

その返事はこうであった。「わたしについてきなさい。あなたがたを，人間をとる漁師にしてあげよう。」（マタイ４：19）　漁師シモンは自分の召しを受けた。疑い深く不信仰で無学な経験の浅い激しい気性のシモンは，主の道が容易な道であることも苦痛のない道であることも，悟らなかった。シモンは叱責と非難の言葉を聞くのである。「ああ信仰の薄い者よ」，「サタンよ，引きさがれ，わたしの邪魔をする者だ。」（マタイ16：23）しかし主は彼に問われた。「『……あなたがたはわたしをだれと言うか』。シモン・ペテロが答えて言った。『あなたこそ生ける神の子キリストです』。」（マタイ16：15，16）

疑い深いシモンは，信仰の使徒ペテロとなった。灰色の羽のカナリヤは救い主の全幅の信頼と変わらぬ愛を得る者となった。

救い主が熱心で力ある宣教師を選ぼうとされたとき，主はその人を賛成者ではなく，反対者の中から捜し出された。タルソのサウロは教会を滅ぼそうとし，主の弟子を脅迫・殺害しようと息巻いていた。しかしそれはダマスコへ行く途中の経験で変わった。主はサウロについて言われた。「……あの人は，異邦人たち，王たち，またイスラエルの子らにも，わたしの名を伝える器として，わたしが選んだ者である。わたしの名のために彼がどんなに苦しまなければならないかを，彼に知らせよう。」（使徒９：15，16）

迫害者サウロは改宗者パウロとなった。灰色の羽のカナリヤと同じく，パウロにも汚点があった。彼自身が言っている。「そこで，高慢にならないように，わたしの肉体に一つのとげが与えられた。それは，高慢にならないように，わたしを打つサタンの使なのである。このことについて，わたしは彼を離れ去らせて下さるようにと，三度も主に祈った。ところが，主が言われた，『わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。……』」（Ⅱコリント12：７，９）

主は絶望した者に望みを，弱い者に強さを，捕われた者に自由をもたらされた。主は来たるべきより良い生活，永遠の生命についてさえ教えられた。

パウロもペテロも真理のために持てる力を使い，命を失った。贖い主は不完全な人間を選び，完全への道を教えられた。主は昔，そのようにされた。そして今もそうされる。灰色の羽のカナリヤを使って。

主はあなたがたや私をこの地で主に仕えるべく召し，私たちの働きを求めて仕事に任じられた。務めは一貫している。良心の葛藤はない。私たちが苦闘するとき，ひるむとき，祈り願おうではないか。「導きたまえ，おお導きたまえ，大いなる我らが造物主，闇より抜け出て 今ひとたび 奮起すべく。」（ヤンカーズ高校「ファイトソング」より）

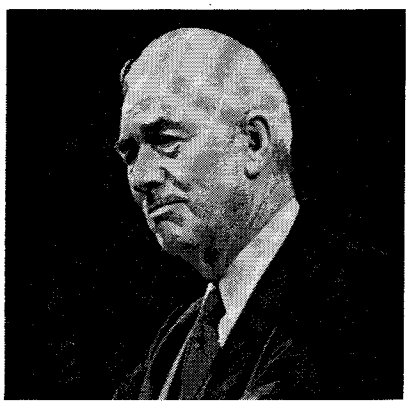
言われた仕事が無意味で不必要でつまらなく見えるかもしれない。私たちは疑う誘惑を受けるかもしれない。

「父よ，私はきょうどこで働きましょう？
私の愛は暖かくあふれ出ました。
父は小さな場所を指し
言われました。『あそこの手入れを。』
すぐさま答えました。『ああ，いいえ，あそこではなく。』
だってだれも目に留めないでしょう
私がどんなによく働いても。
あんな小さな場所でないところをどうか。
父は言われました，おだやかな声で
やさしく答えられました。
『ああ，おまえよ，汝が胸をはかり見よ。
彼らがために働くのか我がために働くのか。
ナザレは小さな場所，
ガリラヤも小さな場所。」
——ミード・マックガイアー——

私はきょう，こう祈りたい。真実心からガリラヤの人に従い，その御名をたたえ，持てる愛を反映した生活をするように。天父が私たちに御子を与えられたことと，イエス・キリストが私たちのために命を落とされたことを忘れないように。イエス・キリストが生きておられることを証し，私たちがその聖なる賜物にふさわしい者となるようにイエス・キリストの御名により祈るものである。アーメン。

救いは教会を通じて得られる

――狭い道の後に来る大いなるもの――



十二使徒評議員会会員
マーク・E・ピーターセン

この世で導きと教えを施す御業に就かれた救い主が教会を設立されたとき，また当時の十二使徒が教会をさらに発展させている間に，ひとつの重要な事実がはっきりと浮彫りにされた。それは，救いは教会を通じて得られるということである。

救いは分離した組織や分烈したグループ，あるいは個人的な党派からは得られない。主の教会によってのみ得られるのである。なぜなら主の教会は主が設立されたからである。

聖徒たちをととのえるために組織されたのが教会であった。

奉仕の業のために建てられたのが教会であった。

パウロがエペソ人に語ったように，キリストの体を建てさせるために用意されたのが教会であった。

従って，救いは教会にあり，教会から出，教会を通じてのみ得られるのである。

主は一本の狭く細い道を設けたが，「それを見いだす者が少ない」ことを承知しておられた。

主は，正式に組織された主の教会によらなければ救いが与えられないようにされた上に，教会員がさまざまな教えの風に吹きまわされたり，もてあそばれたりしないように，また悪巧みをもってだまし惑わそうとする巧妙な人々から守られるように，守護者を置かれた。（エペソ４：14参照）

その守護者とは，パウロのエペソ人への手紙によれば，まず第一に神が特別な目的のもとに教会の長として選ばれた使徒と予言者であった。

彼らは神より霊感を受けた教会の指導者であった。

彼らは主の代弁者であり，彼らの語る霊感に満ちた言葉は主の御心であり，主の御旨であり，主の御声であり，救いに導く神の力であった。（教義と聖約68：４参照）

このような天の導きを受けては，もはや迷うべくもなかった。

しかし主の時代にも，偽りの教えを教えて，民を誤った道に誘う人々がいた。救い主は彼らを痛烈に批判し，彼らが説いているはずのモーセの律法からの背教だと非難された。

主は彼らに言われた。「モーセはあなたがたに律法を与えたではないか。それだのに，あなたがたのうちには，その律法を行う者がひとりもない。」（ヨハネ７：19）

そしてまた言われた。「もし，あなたがたがモーセを信じたならば，わたしをも信じたであろう。モーセは，わたしについて書いたのである。」（ヨハネ５：46）

何と悲しい言葉であろうか。もし人々が当時の狡猾なにせ教師ではなくモーセを信じたならば，キリストを信じたであろう。モーセはキリストについて書いたのだから。またもしイエスを受け入れたならば，イエスの教会から救いを得たであろう。

しかし人々はにせ教師に目をくらまされてモーセをもキリストをも拒み，そのため主の教会に入らず，教会から得られる救いも受けなかった。

現在の聖書にはモーセの著書のすべては含まれていないが，救い主の時代

にはあったことが明白である。なぜならイエスは長老や律法学者を，モーセがキリストを証した言葉を信じていないと批判したからである。

モーセが救い主を証したこと，およびモーセを信じようとしなかった民が，そのことによりキリストを受け入れる用意ができていなかったことは興味深いことではないか。モーセの律法はキリストに連れて行く養育掛だというパウロの言葉が思い出されはしないだろうか。(ガラテヤ３：24，25参照)

モーセばかりでなく，他の予言者も主について書いている。ペテロはイエスについて言った。「予言者たちもみな，イエスを信じる者はことごとく，その名によって罪のゆるしが受けられると，あかしをしています。」(使徒10：43)

使徒行伝の28章には，パウロがローマ滞在の間に大勢の人がやってきたので，「朝から晩まで，パウロは語り続け，神の国のことをあかしし，またモーセの律法や予言者の書を引いて，イエスについて彼らの説得につとめた」(使徒28：23)ことが記録されている。

これらのことから見れば，当時の聖典はすべての予言者が証した通り，繰り返し救い主について語っていたことが明らかである。

それゆえ，聖典がはっきりと主について告げていることを充分承知しながら，民を迷わせ，主を十字架につけようと扇動した人々に，弁明の余地はない。

新約時代のこのにせ教師たちは神のまことの御業から分離，離脱して自分の宗教を作った。人の考え出したしきたりを持つ彼らは，御業を始めたイエスに反対する主流となったのである。

あなたがたはそれらの宗派のうち幾つかの名前を知っているであろう。パリサイ派とサドカイ派が一番知られている。両派とも背教の教えを持ち，主から非難され，盲信的でついに主を十字架につけるまでに至った。

ほかにも宗派がある。

モーセの律法を厳格に守るザドク派。

死海の書を書いたと信じられているエッセネ派。彼らは神殿での礼拝を拒んだ。

反ローマの熱心党。

とりわけ強力だったのは，ギリシャ哲学をモーセの律法と融合させようとして民に強要したヘレニストである。彼らも神殿での礼拝を拒んだ。

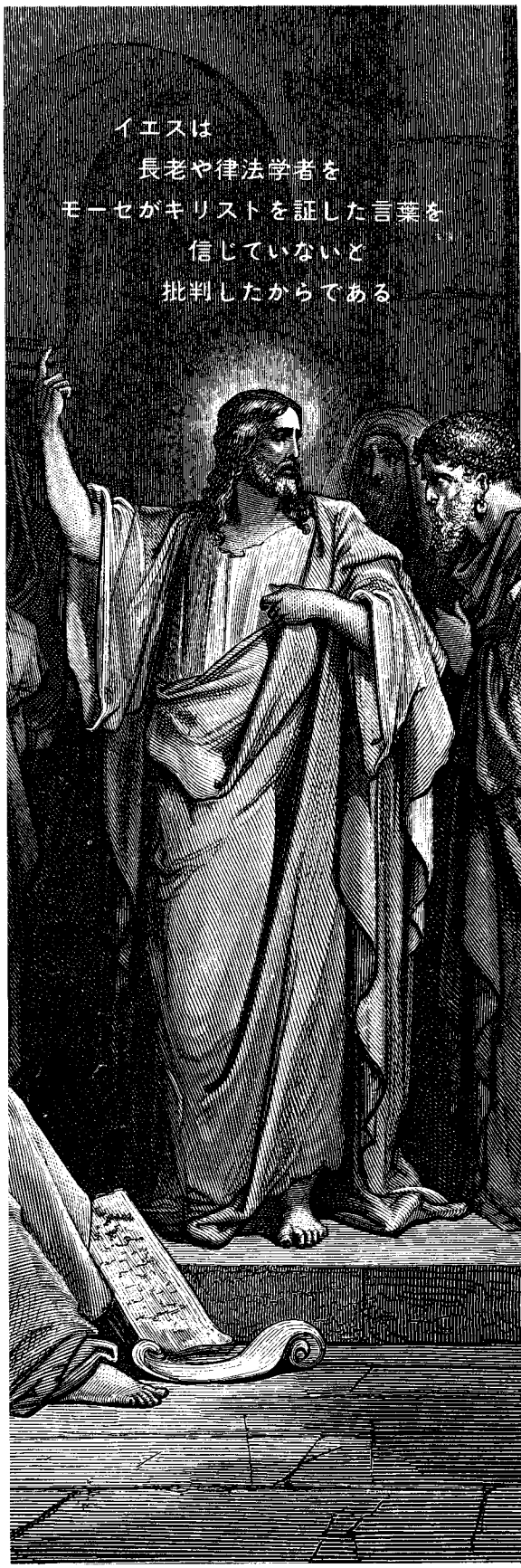
しかし主の在世中にも新しい背教が進んでいた。ヨハネ伝の６章の記録に見られるように，それは早くから起きていた。新約聖書のこの章を読めば，主の弟子たちの多くがキリストの純粋な教えを受け入れようとせず，主から離れ去ったことがわかる。

落胆されたイエスは，十二使徒に向かって，「あなたがたも去ろうとするのか」と尋ねられた。

するとシモン・ペテロが答えた。「主よ，わたしたちは，だれのところに行きましょう。永遠の命の言をもっているのはあなたです。」

この永遠の生命の言葉が，脱落した人々ではなく，信仰厚く忠実に主のもとにとどまった人々と共にあったことに注意していただきたい。

それに引き続き十二使徒の時代に，再びひどい背教が起こった。その結果新約聖書の書簡のほとんどが背教と闘



うために書かれたのである。

歴史家は，キリスト以後100年間のうちに30ものキリスト教宗派が出現したと述べている。

パウロが書いたコリント人への最初の手紙を見れば，教会初期の背教の証拠が歴然としている。

パウロはこの手紙の中で，キリストには分争があり得ないと証した。彼は言った。「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧める。みな語ることを一つにし，お互の間に分争がないようにし，同じ心，同じ思いになって，堅く結び合ってほしい。」（Ⅰコリント1：10）

ごく初期に興ったキリスト教の宗派には，次のようなものがある。

ユダヤ的キリスト教を試みてモーセの祭式を取り入れさせたユダヤキリスト教。

至福千年派。

聖祭式にぶとう酒ではなく水を用いる習慣を取り続けたエビオン派。

エホバとモーセの律法を否認したグノーシス派。

バプテスマの施行で知られるエルケサイ派。

至高なる夫の母の存在を教えたアーカン派。

現在もエジプトに残存するコプト派。シリアキリスト教。

別のバプテスマ施行派のマンダヤ教。マネキン派，その他数々の宗派。

紀元70年頃にエルサレムが崩壊した後，ギリシャの影響が地域の既存文化に根を下ろしたのを利用して，ヘレニストがキリスト教の上位に立った。その結果ギリシャ哲学思想がキリスト教に強く食い入り，福音の教義と儀式が変えられた。これについては，ニケア宗教会議で論争したアリウスとアタナシウスがどちらもギリシャ哲学者であったことで，より容易に理解できるであろう。それは，初期の新約聖書の原本がギリシャ語で書かれた理由でもある。

ここにあげた歴史の一端は，分派を防ぐことの大切さをはっきり示している。パウロが述べたように，ある者は「わたしはパウロにつく」「わたしはアポロに」「わたしはケパに」（Ⅰコリント1：12）と言うが，キリストには分裂はない。イエス以外に救い主はなく，イエスは人の造った教義や儀式に従った者でなく，御自身がお定めになった狭く細い道を歩む者だけを救われるのである。

そうであるならば，教会員はまことの教会から離れず，背教せず，破門されるような罪を犯さないことが実に重要である。

人が自ら主の教会から離れるならばそれにより救われるための手段から離れることになるのである。救いは教会を通じて得られるからである。

現在ある人々は自分の宗教を造り出しており，その中のある者は教義と聖約85章を盾に取ろうとする。

彼らは，教会はすでに道をはずれ，指導者に霊感は下らず，主に属ける事柄をあずかる「一人の強くして力ある者」が必要だと主張する。また確たる証拠もなしに，自分でその力ある者を名乗り出る。

その章に，彼らが見落としたひとつの決定的な聖句がある。そこには，背教者や教会から絶たれた人々は，末の日に至高者なる神の聖徒たちの中に数えられないと書かれている。なぜなら救いはほかならぬ教会にあるからである。

主の御言葉に耳を傾けなさい。

「また，大神権を有する者はもちろん小神権を有する者，教会員たちにして律法の書にその名を見出されざる者，或いは教会に叛きたること知られまたは教会より絶縁せられたること知られたる者は，その日に於ていと高き神の聖徒の中にあるゆずりを見出すことなかるべし。」（教義と聖約85：11）

**人が自ら
主の教会から離れるならば
それにより
救われるための手段から
離れることになるのである。
救いは
教会を通じて
得られるからである。**

しかし自分の宗教を造り出す人は教会を破門された人に限らない。道徳的な背罪や主の定められた規範を破ったために教会から閉め出される人々がいるが，彼らもこの聖句を熟考すべきである。

人がもし心底神を信じるならば，またもし自分の救いに思いをかけているならば，聖句に言われているように，救いが教会を通して得られること，および何かの理由でもし教会から絶縁されるならば神の王国のゆずりを失ってしまうことを認識すべきではなかろうか。

ブリガム・ヤング大管長は背教者の行く末を意味深長な言葉で表現している。

「人々はなぜ背教するのだろうか。今『古船シオン』に乗っていると想定しよう。私たちは大海のただ中にいる。嵐が襲うと，船乗りの言うように船は非常に難渋する，ある人が言う，『ここにはいまい。これが『シオン』という船とは信じられない。』『しかし私たちは今大海のまん中にいる。』『いやかまわない。ここにはもういまい。』彼は上衣を脱ぎ，海中に飛び込んだ。彼はおぼれないだろうか。おぼれる。この教会を離れる人はこれと同様である。教会は『古船シオン』である。この船の中に留まろうではないか。」

また彼はこのようにつけ加えた。「もし全能者のかかげるろうそくがここから輝き出ないとしたら，ほかのどにこ光を捜しても無駄である。」

そしてこのイスラエルのつわものはこう語った。

「教会員のある者に，万事を導く全教会の大管長の権利を疑う気配が見えたときには，必ずや背教のきざしを，もし助長されたならば教会からの逸脱と終極の滅びへと導かれるその精神を目にするであろう。どのような召しの資格であれ，この王国の正式に任命された役員に対して反対の挙動が感じ取られるときには，もしそれが持続されるならば，それと同様の結果を招くであろう。」ブリガム・ヤング大管長はこのように述べたのである。(「ブリガム・ヤング説教集」〔英文〕P. 82, 83, 85)

主の御言葉は簡明で理解しやすい。教会から背教した者，主の備えたもう正規の法廷で教会から絶縁された者は悔い改めない限り，いと高き神の聖徒たちの間にゆずりを見いだすことはないであろう。

救いは，古代あるいは初期のキリスト教時代にモーセの教えを汚したり，律法を犯したり，儀式を変えたり，永遠の誓約を破ったりしたさまざまな宗派の中に見いだされないのとまったく同様に，今日の各分派にも見いだされない。

主は教義と聖約の同じ章の中で，さらに言っておられる。「……覚えの書に載せられざる者たちは，すべてその日にゆずりを与えられずして寸断にせられ，彼らの受くべき分は不信者の中に定められ，その所にて悲しみ切歯(はがみ)することあらん。」(教義と聖約 85：9)

教会から破門されても神権と神殿の祝福は取り上げられないと言う人がいる。結び固めの力を持つ人は解く力もあることを思い出そうではないか。主はまことのしもべについて，「あなたが地上でつなぐことは，天でもつながれ，あなたが地上で解くことは天でも解かれるであろう」と言われたからである。(マタイ16：19，教義と聖約132：46)　破門は教会の祝福と権利，特権の一切を剝奪する。

救いほどに貴重なものがあるだろうか。救いはいかにして得られるのだろうか。それは，教会によって，教会のプログラムに「熱心に携わって」のみ得られるのである。

他に道はない。もし私たちがイエスを雄々しく証せず，悔い改めなかったならば，王国の王位を失って他の場所に行かせられる。(教義と聖約76：79参照)

しかし悔改めは何とすばらしいことであろうか。主は，罪を悔い改めてそれよりのち主の命令のすべてを守るならば，赦しが与えられて，新たに生れることが可能であると言われた。

不従順な者にとって，これより大きな約束があるだろうか。

主は罪人を救うためにこの世へ来られた。主は医者が必要なのは病人であると教えられた。このように，主は病人を招いておられるのである。他のすべての人と同様に，我れに来よ，悔い改めよ，汚れを去り，聖められ，主の王国に救われよと。

主なる神は言われる，「わたしは悪人の死を好むであろうか。むしろ彼がそのおこないを離れて生きることを好んでいるではないか。」(エキゼエル18：23)

主は善と慈悲をもってこのように呼ばわっておられる。

「すべて重荷を負うて苦労している者は，わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるからわたしのくびきを負うて，わたしに学びなさい。そうすれば，あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく，わたしの荷は軽いからである。(マタイ11：28—30)

だが，主のくびきは教会から離れはしないこと，主の荷は私たちに対して，神の口から出るすべての御言葉に従うよう求めていることを忘れないようにしようではないか。これらのことを，聖なる主イエス・キリストの御名によりへりくだって証する。アーメン。

結　婚

中井輝子
徳山支部

結婚を考えていたその頃の私は，福音を学ぶにつれ，一体自分は神様が望んでおられる結婚をしようとしているだろうか，と思うようになりました。神様が教会員同志の結婚を望んでいらっしゃるとわかったときは，結婚した後のことを想像してその結婚が良いものでないとわかって来ましたが，何か割り切れないものが残り，主に断食し祈り求めました。すると不思議にその苦しみは取り除かれ，あきらめることができました。もしこの決断を誤っていたら，今私に与えられている祝福はないと思います。９月24日，沖縄の自衛隊に勤め那覇支部に席を置かれる松田敏美兄弟と福岡支部において結婚式を挙げるに至るまでの体験を述べてみたいと思います。

昨年の８月，瀬の本高原でファミリーキャンプが行なわれました。多くの兄弟姉妹と共に地上での天国に来たような気持を味わい，同じ目的を持つ人々がこんなにたくさんいるのだと思うと，証が一段と強くなっていくのを感じました。仕事の都合で，１日早く帰らなければならなかった私に福音を述べる機会が与えられているのを知ったのは，熊本駅に着いたときでした。コインロッカーを探していると，親切にその場までつれて行って教えて下さった人と思いがけず話す機会に恵まれたのです。みたまが助けてくれました。私の口からは主を賛美する言葉とファミリーキャンプでの素晴しい経験がとめどもなく出てきました。それからしばらくして文通が始まり，文通が友情，愛情へと進んでいくのがわかりました。

私は永遠に救われる道を知っている。私はそのことを兄弟に伝えたいと思いました。幸いにも兄弟は信仰を持ちたいと思っておられたので，10月も終り頃徳山支部に来られ，宣教師の方から紹介を受け，モルモン経を求められました。祈りが聞き届けられたとはっきりわかったのは，兄弟が転勤されてからでした。彼は那覇支部を探し歩いて，宣教師からレッスンを受けていたのです。「求める者には与えられる」と聖書にあります。「主は言われた，『ますの下や寝台の下に置くために，あかりを持ってくることがあろうか。燭台の上に置くためではないか。』」（マルコ４：21）信仰を誇りにしていて良かった。そう思った私でした。プロポーズを受けたのはそのときでした。私はうれしい中にも複雑な気持でした。というのは，兄弟がまだ知恵の言葉のレッスンを受けていなかったからです。しかし兄弟の人柄もわかっていましたし，幸福な家庭を築いていけそうな気持に半分なっていましたので，同じ目的を持つことができるなら結婚したいと返事を致しました。この世だけでなく永遠に続く家庭は，いかなる努力を払っても惜しくないほどの神様からの大きな祝福ですから。それから少ししてレッスンは知恵の言葉に入ったようでした。男性にとって一番むずかしい，神様からの試練です。手紙にも電話にも，そこから逃げ出したい気持を持っておられることがありありと見えました。私に何か気休めみたいなものを求めておられましたが，私は「宣教師の人に聞いて下さい，神様の戒めですから……私は信頼していますよ」と答えただけでした。沖縄と徳山，遠く離れた私にできることはただひとつ，真心から祈ること，そう思った私でした。

３月も終り頃，とうとう私はその言葉を聞きました。「**長老がバプテスマを受けなさいと言われるのだが。**」「**受けられたらいかがですか。きっと聖霊があなたを助けてくれると思いますよ。**」そう答えた私の喜びを御想像願えるでしょうか。主の助けにより，兄弟はたった３週間で知恵の言葉の戒めを実践する人となったのです。

４月７日，兄弟にとっても私にとっても，忘れることのできない日でした。本当に祝福されたバプテスマ会でした。共に祝福にあずかろうと思い切って沖縄に行った私には，その会が自分のバプテスマのときよりもっと霊的に感じられました。そして那覇支部の兄弟姉妹の大きな愛が兄弟を助けて下さったことを知りました。

あらゆる面において私たちは祝福を受けています。いくら感謝してもたりないくらいです。「何事でもわたしに願うならわたしはそれをかなえてあげよう」と主は言われます。その祈りが正しいことであればきっといつかはかなえられると信じています。悩むことは何もなくなりました。教会員同志で神様の望まれる末日聖徒としての家庭を築きたいという私の夢は実現されました。これもすべて，兄弟姉妹や家族の暖い励ましがあったからだと思い，心から感謝しております。そして神様の導きと助けがあってこそこの大きな祝福があることを証し，兄弟姉妹の皆様の上に豊かな恵みと健康が与えられますことを祈ります。すべてを御子イエス・キリストの御名によって証致します。アーメン。

僕の証

北山裕之
札幌支部

僕はこの末日において，モルモンの家庭に生まれました。そして8歳でバプテスマを受け，12歳で神権を受けました。

僕はこうしてもう13年間も教会に行っているのですが，いまだ日曜日に教会の行くのは難ぎです。また，去年からホームプライマリーを家で始めたので，これにも出ないといけませんが，それに出るのもあまり好きではありません。それは，土，日と日を取られると，友達とぜんぜん遊ぶこともできませんし，勉強する時間も少なくなります。でもそれは僕に一番必要なことなのです。日曜日に朝早く遠い教会まで行くのはとてもいやです。でもいつも行きます。すると必ず帰りには「来てよかったなあ」と思うのです。

教会には，会員ひとりびとりの愛が本当に多くあふれんばかりにあります。そこには世間の悪から遠ざかり，神様の御心を知ることのできる場所があります。本当に平安に心のやすらぐ唯一の場所です。それを強く感じます。

僕は新しく兄弟たちが神様に召されていくのを見ると，自分のことのように喜びたくなります。それは心の底からこみあげてくるような喜びです。そのとき，自分の友達がそうなれば喜びも一段と大きなものになるだろうと思うのです。すると友達をどうしても教会へ導き入れたいという気持でいっぱいになります。

僕がそういう気持になることを，神様はちゃんと知っていらっしゃいました。プライマリーがそうです。家が遠く，とても教会には連れていけません。でもプライマリーならば僕の家で行なっているので連れて来ることができます。神様はそのために，ホームＭＩＡも開いてくれました。僕はこうして友達をＭＩＡに連れて来ることができました。そしてその友達はきっと教会に入ってくれることを信じます。

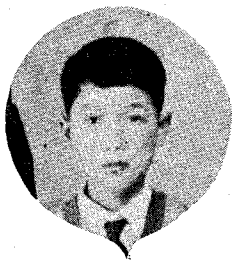
僕が末日の世にモルモンの家庭に生まれたのは，このためかもしれません。

神様は，けんそんに祈るときに必ずその祈りをかなえてくれることを知っています。神権のある末日聖徒イエス・キリスト教会は真実まことの唯一の教会であることを証します。

イエス・キリストの御名により。アーメン。

ぼくの証

柳沢俊二
札幌東支部



毎週通っている札幌東支部には，アロン神権者は3人います。ぼくは，その中のひとりで，執事です。

家族は，みんなモルモンで，ぼくは，8歳のとき，お父さんからバプテスマを受けました。この支部でも，たくさんの「きゅうどう者」がバプテスマを受け，会員になりました。ぼくも，時々バプテスマ会に出席しています。それを見ていると，自分がバプテスマを受けたときの，すばらしい感激を思いだします。そのときは，たいへんすがすがしい気持で，喜びがこみ上げてきました。真の教会のメルケゼデク神権によって，神様の国への第一歩をふみしめたことを，たいへんうれしく思っています。

毎週家族いっしょに通っている教会も，時々，行きたくなくなってしまうことがあります。また，教会に出席しても，先生の話が耳に入らず早く集会を終えて，昼ごはんを食べてしまいたいなあと思うこともあります。けれども，12歳になってアロン神権の執事に聖任されてからは，聖さん式のパスをさせてもらえるようになりました。それからは教会へ行くのがたのしみになりました。

執事の責任は，(1)聖さんをくばる (2)聖さん会で話をする (3)聖さん会で聖句を朗読する (4)指導者のメッセンジャーを務める (5)だん食献金を集める (6)集会場の整理整とん (7)会員への集会の通知その他いろいろあります。ぼくはまだ，全部を完全にはできませんが，少しずつやっています。だん食証会で，自分から証を言えるようになりました。

聖さんをパスするときは，会員かそうでないかを知っていなければならないので，出席者の名前をおぼえるようにしています。でも時々，知らない人が出席していたときは，管理者や，祝福する人の方を見て，指示を受けます。

ぼくは，将来メルケゼデク神権をもらって，2年間の伝道に出てみたいと思っています。そして，多くの人に伝道して日本にも神殿ができて，神様の国に近づく日が早く来ればいいと思います。この教会の教えによって，日頃の行動をいろいろ反省する機会のあることを感謝します。

この教会は，真の教会です。ぜんぶイエス様の御名によって，アーメン。

聖 徒 の 道
1973年11月20日発行（毎月1回20日発行）　第17巻第11号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可